



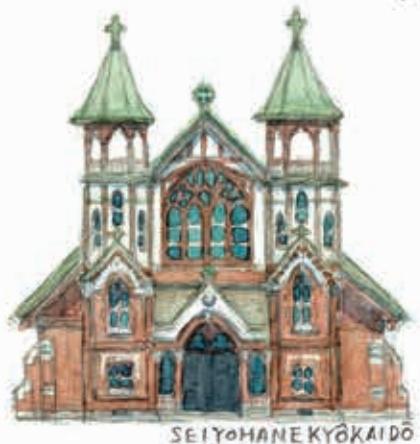
# あいちのたてもの 明治村編

AITI NO TATEMONO MEIZIMURA HEN

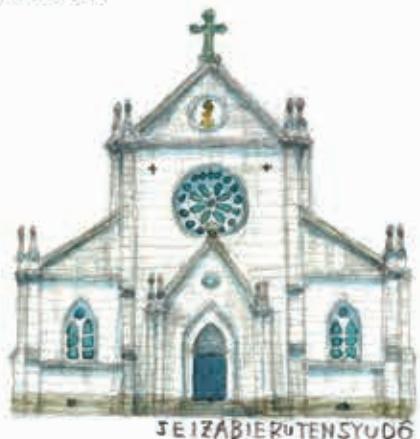


KITASATO KENKYŪ-JO

REGISTERED  
TANGIBLE  
CULTURAL  
PROPERTY



SEIYOHANE KYOKAIDO

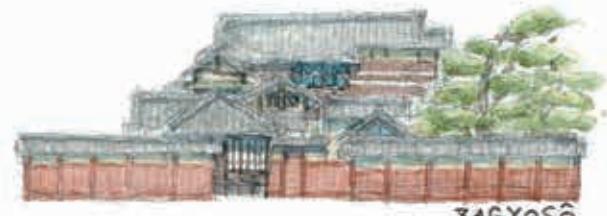


SEIZABIERU TENSYŪDŌ

あいちのたてもの 明治村編



TOMATUKE



ZAGYOSŌ

愛知県  
国登録有形文化財  
建造物所有者の会



KUREHAZA



SHIMIZU-IN



SIBAKAWATEI



TETSUDŌRYŌJIN BASIKI KŌZYŌ

愛知登文会



TEIKOKUHOTERU

あいちのたてもの  
"明治村編" MAP



あいちのたてもの  
明治村編

絵と文 村瀬 良太

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会

北口

SL 東京駅

5丁目

内閣文庫 » p.34

帝国ホテル中央玄関 » p.72

金沢監獄中央看守所・監房 » p.40

前橋監獄雑居房 » p.40

金沢監獄正門 » p.40

聖ザビエル天主堂 » p.32

梅園

呉服座 » p.56

4丁目

工部省品川硝子製造所 » p.60

鉄道寮新橋工場・機械館 » p.64

日本赤十字社中央病院病棟 » p.38

名古屋衛戍病院 » p.38

第四高等学校  
武術道場「無声堂」 » p.36

清水医院 » p.50

東松家住宅 » p.48

正門

レンガ通り

第四高等学校  
物理化学教室 » p.36

大井牛肉店 » p.60

三重県尋常師範学校・蔵持小学校 » p.36

森鷗外・  
夏目漱石住宅 » p.58

西郷従道邸 » p.26

聖ヨハネ教会堂 » p.24

2丁目

市電 京都七条駅

神戸山手西洋人住居 » p.30

北里研究所本館・  
医学館 » p.28

芝川又右衛門邸 » p.66

幸田露伴住宅  
「蝸牛庵」 » p.58

菅島燈台  
附属官舎 » p.42

市電品川燈台駅

品川燈台 » p.42

西園寺公望別邸  
「坐漁莊」 » p.52

入鹿池

1丁目

博物館 明治村

所在地: 愛知県犬山市字内山1番地

は、本書で取り上げていない建物

# はじめに

私たちのまわりには、歴史を積み重ねた様々な建物がごく自然にまちに溶け込んでいます。「あいちのたても」シリーズは、愛知県内にあるそのような文化財として貴重な建物のうちの国登録有形文化財の魅力を紹介する冊子として、これまで「ものづくり編」「まなびや編」「いのりのば編」「すまい編」の4冊を発行してきました。

これらの冊子は文化庁の補助金をもとに年1冊を制作してきましたが、2021年度でひと区切りとなり、翌2022年度は休止せざるを得ない状況でした。ただ、ご好評をいただいている冊子を継続して発行したいという思いから、かねてより特集などで取り上げていた博物館 明治村の魅力を、この機会に改めて紹介できないかと考えました。

明治村は近代建築の保存活用を牽引してきた愛知県が誇る施設です。冊子の制作に協力いただいている建築史家の村瀬良太氏は、明治村に創設の頃から関わり続けてきた恩師の飯田喜四郎先生から、折に触れて貴重な証言を聞いており、それを何かのかたちで残したいという思いがありました。愛知登文会としても、明治村の果たした役割と魅力を紹介することは意義あることだと考え、明治村にも相談したところ、全面協力を得られることとなり、クラウドファンディングで資金を募ることとなりました。

予想を超える多くの方々からご支援をいただくとともに、公益信託大成建設自然・歴史環境基金の助成金も受けることができ、当初予定よりもボリュームアップした冊子を制作することができました。ご協力いただいた皆さんに、改めて感謝申し上げます。

この冊子が明治村の魅力を改めて知るきっかけとなり、また歴史的建造物の保存活用について考える一助になることを願っています。ぜひ、この冊子を片手に明治村散策をお楽しみください。

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会  
会長 小栗 宏次



## もくじ

◆ 和風建築	48	東松家住宅	47
◆ 洋風建築	47	【コラム】銅板プレートと市川清作	46
はじめに	46	【コラム】特別寄稿 明治村を支える人々① 中野裕子さん	44
特別インタビュー 飯田喜四郎先生	42	【コラム】特別寄稿 明治村を支える人々② 石川新太郎さん	40
「明治村ができたとき」	40	【コラム】明治村で昼食を	38
【コラム】明治村の生みの親 谷口吉郎	38	【コラム】明治村タイル紀行	36
西園寺公望別邸 「坐漁荘」	36	◆ 新しい様式	34
西郷従道邸	34	鉄道寮新橋工場・機械館	32
北里研究所本館・医学館	32	芝川又右衛門邸	30
神戸山手西洋人住居	30	帝国ホテル鳥瞰図	28
聖ザビエル天主堂	28	帝国ホテル中央玄関	26
内閣文庫	26	飯田喜四郎先生特別インタビュー	24
それ以外の洋風建築1 学校	24	「帝国ホテル中央玄関の移築と復原」	22
それ以外の洋風建築2 病院	22	【特別インタビュー】明治村を支える人々③ 魚津源二さん	20
それ以外の洋風建築3 監獄	20	【特別インタビュー】明治村を支える人々④ 後藤泰男さん	18
それ以外の洋風建築4 灯台	18		16
【コラム】明治村を支える人々⑤ 中野裕子さん	16		14
【コラム】特別寄稿 明治村を支える人々⑥ 後藤泰男さん	14		12
広告	12		10
国登録有形文化財とは	10		8
82	80	78	74

特別インタビュー

# 飯田喜四郎先生 明治村ができたとき



ここに掲載したのは、2021年9月から23年1月にかけて行った、飯田喜四郎先生の明治村に関するインタビューをまとめたものである。

飯田先生は1924年東京に生まれ、東京帝国大学航空科に入学するも、在籍時に終戦をむかえ建築学科へ転科。その後、ゴシック建築に感銘を受けてフランスへ留学し、パリの文科省建築局文化財建造物特別講座で歴史的建造物の修復と保存を学ばれた。

明治村との関わりは1962年に遡る。翌63年の名古屋大学への着任に合わせて明治村建築委員会へ招聘された。また1997年からは四代目館長に就任し、2010年まで重責を果たされた。足掛け60年以上に渡り明治村を支え続けた創設期のメンバーである。

インタビューは、日当たりの良い飯田先生の自宅のリビングで行われた。当時のことを思い出すようにゆっくりと語られた話から、明治村の果たしてきた役割や、建物を残すことの意味を感じていただければと思う。

(聞き手と文責:村瀬良太)



photo:Sayaka Ito

## 博物館 明治村とは

—昭和40年に開村してから60年近くが経ち、博物館 明治村（以下「明治村」）は多くの人々に親しまれる施設となっています。そこで改めて、創設から関わってきた先生に、そもそも明治村とはどのような施設として構想されたのか伺いたいと思います。

端的にいいますと、明治時代の典型的な建物をもつてつくりた施設となります。

典型的とは、明治になつて新しく入ってきた建物、例えば洋館や学校、病院や役場、教会、監獄などといった建物から、灯台や鉄道などのインフラの一端を担つた建造物をいいます。

それらを展示するための場所をつくつて移築することが目的であり、私が関わり始めた時には、その方向性は決まっていました。

—先生から見た明治の建築とはどんな印象だったのでしょうか？

を移築して展示することに不安はありましたか？また、一般の人々には何を感じてもらいたかったのでしょうか？

開村前は、お客さんが来なかつたらどうしようとは思いました。ただ、とにかく良い建築を見てもらいたかった。名鉄<sup>(※注①)</sup>がお金を出してくれていたので、私たちもいい加減なものはできなかつたです。一般の人々に建築の良さを伝えるのは難しいので、建物の「顔」となる部分は見られるようにしていました。

—「顔」というのはファサード<sup>(※注②)</sup>だけではなく、見どころ、という理解でよろしいですか？

はい。一方で、ヨーロッパでは外観を大事にする手法が主流です。日本では材質や細部にこだわるやり方もありますが、それは私のスタンスではなかつた。それと、一般的人々に何を感じてもらいたかったのかについては、まずは明治という時代に直に触れて欲しかったです。

—それは、明治の建物を簡単に壊してしまう物を残すことは新しい社会をつくろうという気分と逆行していました。また建築界

実は私にとって、明治は分からぬ時代でした。というのも、昭和30年代の終わり頃では明治の建物について研究も進んでおらず、いつのものか、誰が建てたものか、設計者の名前も分からぬという、あらゆる評価軸が定まっていない状況でした。でも街中に佇む建物の凄しさを感じていた。だから評価されずに壊されていく姿を見た、自分達で何かできればという強い思いがありました。

—先生は昭和28年から31年までフランスへ留学して、文化財建造物について学んでこられましたが、それ以前から明治の建物に対してそのような意識はあったのですか？

いいえ。フランスに行く前はあまり気にしていませんでした。ただ、明治は日本の歴史上から見ても画期となつた重要な時代です。そういう歴史を伝える建物が簡単に壊される状況は、本当に情けないと思いました。

—そのような社会状況で、あえて明治の建物

ことへのアンチテーゼや、あるいは古い時代を懐かしみ温故知新を促すといった意識もありましたか？

言葉にするのは難しいですが、行き先の見えない状況に方向性をつけたかつた、といふ感覚が近いかもしれません。

## 創設のころ

—先生が具体的に明治村と関わられたのは、いつ頃からだつたのでしょうか？

私が明治村に関わったのは、昭和37年12月の第2回の理事会<sup>(※注③)</sup>からになります。明治村の構想はその前に発表されていましたが、建築委員会は翌38年につくられ、7月にスタートしています。私は委員だつた太田博太郎<sup>(※注④)</sup>さんと関野克<sup>(※注⑤)</sup>さんからお声がかかつた。

その当時は高度経済成長期で、古い建物を残すことは新しい社会をつくろうという気分と逆行していました。また建築界

注①：名古屋鉄道株式会社

注②：創設期略年表  
昭和35年 谷口吉郎と土川元夫が構想を話し合つたこと。

注③：建物を正面から見たときの外観

昭和36年10月 第1回明治村設立準備委員会

昭和37年7月 財団法人成立

8月 第1回理事会

昭和38年4月 地鎮祭

7月 第1回建築委員会

昭和39年11月 博物館登録認可

昭和40年3月 博物館明治村開村

注④：1912～2007。建築史家。東京大学名誉教授。文化財建造物保存技術協会理事長などをつとめ、中世の寺院建築や民家の研究をリードした。  
注⑤：1909～2001。建築史家。東京大学名誉教授。明治村二代目館長（1979～1991）。



でも、丹下健三（※注⑥）さんをはじめメタボリズム（※注⑦）などの新しい活動が脚光を浴びていましたから、私たちはそんな社会の気分から反感を買わないように意識せざるを得なかった。

その一方で、私はこの事業は成功するだろうと思つていきました。

—その理由はなんですか？時代の先を見越していただけますか？

いいえ、ただの勘です（笑）

—それはすごい、大当たりでしたね。ところで、

明治村の構想は建築家の谷口吉郎（※注⑧）さんと名鉄の土川元夫（※注⑨）さんが主になつて始められましたよね？

谷口さんは昭和15年に、解体される鹿鳴館（※注⑩）を電車の窓から見て、日本の文明開化の起点ともいえる重要な建物が簡単に壊されてしまうことをうれい、明治という時代の博物館にすべきだったと東京日日新聞（※注⑪）に投稿しました。太平洋戦争のさなかの憲兵がいくらでもいる怖い

## 明治村建築委員会のこと

—建築委員会のメンバーは、谷口さん、太田さん、関野さん以外にどなたがいらっしゃいましたか？

太田さんと関野さんは日本建築史の方で、それに東工大の藤岡通夫（※注⑬）さん、国鉄の菊池重郎（※注⑭）さん、伝統建築の修復の専門家として市川清作（※注⑮）さん、地元から名工大の城戸久（※注⑯）さんと名

城大の伊藤三千雄（※注⑰）さん、そして私が参加しています（※注⑱）。移築と復原に関し

ては、谷口さん、太田さん、関野さん、市川さん、伊藤さん、私の6人が中心になつて担当しました。

—そうそうたるメンバーですね。和風建築出身の方が多い中で、先生はどのような役回りでお声がかかったのでしょうか？

それはフランスで学んだ西洋建築の保存や修復、復原のノウハウが求められたのだと思います。

実は谷口さんは、私が宮内庁に勤めていた頃に東宮御所（※注⑲）の設計で打ち合わせに来ていて、よくお見かけしていました。大先輩ですから、こちらからお話しすることはなかつたですが、ただ向こうも私を知つていて、名古屋大学へ赴任するのを機に明治村へ来てほしいと伝えられました。建築委員会ではどのようなことが話し合われたのですか？

建築委員会の会議は月に一回か2回程度集まりました。場所は一定ではなく、東京だつたり名古屋だつたりしましたが、明



注⑪・現毎日新聞

注⑫・現金沢大学

注⑬・1908～1988。建築史家。

東京工業大学名誉教授。東南アジア諸國の王宮や日本の城郭などの研究に携わった。

注⑭・東京工業大学建築学科卒。国鉄技術研究所建築研究室長を経て、博物館明治村の設立に参与。

注⑮・1908～1979。建築史家。

名古屋工業大学名誉教授。日本建築史の専門家として、多くの城の再建に携わった。

注⑯・初期の建築委員会には他に建築史家の内藤昌や名鉄の斎藤八郎の名も確認できる。

注⑰・次期天皇・皇太子の住まい、皇太子明仁（親王）（平成時代の天皇が皇太子だったとき）の住まいとして1960年4月に竣工した。



時代に、体制への反対意見を出した。逮捕も覚悟していたと思います。

—信念のある方だったのですね。谷口さんは、文章も上手で穏やかな人柄だとばかり思っていました。

それはもう、腹の据わった方でした。それで、戦後になつて同じことが起つた。あちこちで明治の建物がどんどん壊されていったので、谷口さんはなんとかこれを食べ止めたいと思い、当時名鉄の副社長だった土川さんに相談します。

土川さんと谷口さんは金沢の四高（※注⑫）の同窓生で、谷口さんは名鉄の仕事を引き受けていた縁もあつた。それで、土川さんが名鉄の幹部会に詣（はづ）つたのですが、最初は誰も賛同しなかつた。赤字になるのは目に見えていますから。

それでも土川さんは剛腕（ごうわん）な人で、繰り返し説得してなんとかOKをもらって、谷口さんが建築委員会を起こし、博物館をつくるこうということでスタートしたわけです。

注⑥・1904～1979。建築家。東京工業大学名誉教授。明治村初代館長（1965～1979）。文化財保護に尽力し、多数の著書を残した。

注⑦・1903～1974。実業家。名古屋鐵道社長など歴任。名鉄を地方企業開拓を行つ複合企業体へと変貌させ、「名鉄中興の祖」とも呼ばれている。

注⑧・明治16年に井上馨の提唱で建設された国賓や外交官を接待するための迎賓館。設計はイギリスの建築家ショサイア・コンドル。

注⑨・1934～2013。建築史家。名城大学名誉教授。明治村では建築委員会の意向を職員・業者に伝える重要な役割を果たした。

注⑩・1934～2013。建築史家。名城大学名誉教授。明治村では建築委員会の意向を職員・業者に伝える重要な役割を果たした。

治村への移築工事が始まってからは名古屋の場合が多かった。時間は一～三時間程度で、建物の選定など重要な決定が必要なとき以外は、先にあげた6人で集まることが多かったです。

委員会のみんなが共通して思っていたのは、とにかく残すこと。そして復原した建物を見せるのを重視しよう、ということでした。テーマパークのようにすることは考えていないし、そんな余裕もありませんでした。

「移築や保存の要望は建築委員会へ来たのでしようか？」

明治村の構想が発表されて以降、「なんとか残してほしい」という連絡が100件以上もありました。事務所を構えていたわけではなかったので、手紙や電話で各委員などへの問い合わせが多かったです。関西方面の民間からも多かったように記憶しています。また市町村からの連絡もたくさん来ました。

「調査ができなかつた。一日か二日しかない場合がほとんどでした。」

「事前の調査が一日か二日しかできなかつたといふのは衝撃ですね。建物ごとに事情は違うのでしようが、解体までの期間がいかに差し迫つていたかが伝わります。100件以上の問い合わせがある中で、選定する基準はあったのですか？」

基本的には明治期の建物が重視され、その上で建築的な価値で判断されるのですが、まだ研究が進んでいない状況でもありました。また、西郷従道(※図4)や夏目漱石(※図5)などの政治や文化に関わった重要な人物の建物も重視されました。これは最初の委員会の時から共通して意識していました。

それ以外に、個人の好みや外部からの意向なども影響しています。建築委員会以外にも多くの人々が関わっていましたから。ただ谷口さんの意向はやはり強かったです。選定以外でも決定的な場面では発言されました。

それらの建築は、地元では有名だけど全国的には無名のものばかりでした。公共建築でいえば三重県庁舎(※図2)などがそうです。また興津の坐漁荘(※図3)は、市側が引き取りを拒否したので市民団体や企業が連絡してきました。

「昭和30年代から逆算すると明治時代の建物の多くが、その時すでに50年以上経つて老朽化してきていますよね？」

「はい。そのころは、新しく建物を建て替えることに反対する人などほとんどいませんでした。むしろ鉄筋コンクリート造の立派で頑丈なものに建て替えた人が大勢でした。その一方で、建物は雨漏りさえなければ簡単には壊れない。だから、地元で思い入れのある人々から、引き取つてもらえないかとなるわけです。」

そもそも明治村は、基本的に受け身です。引き取つて欲しいと連絡のあった建物を調査して、委員会に諮り判断します。ただ、どの建物も取り壊しが迫つていて満足



図3.. 西園寺公望別邸「坐漁荘」



図4.. 西郷従道邸



図5.. 森鷗外・夏目漱石住宅

「移築や復原に際しての委員会での体制はどう

うだったのですか？

各建物についてだいたい一人もしくは数人が担当につき、サポートにもう一人つく感じでした。その中で、名古屋にて頻繁に明治村に通えた私と伊藤さんがサポートにつく場合が多かったです。移築工事が本格化する昭和39年から41年くらいまでは、私と伊藤さんは週に3日くらい通っていました。

また、委員会の中では発言にあまり優劣はありませんでしたから、自由に意見を出し合いました。ですから、自然と出席した人の意見が通ることになります。  
一先生は東松家住宅(※図6)にも関わられたと伺ったのですが、そちらはどのような形でだつたのでしょうか？

実は、あの建物は私は担当ではなかったのですが、色々な事情があって関わることになりました(笑)東松家住宅は解体の話を聞いて、こちら側から残して欲しいとお願いに行つた珍しい例です。

ただ持ち主が残すつもりがなくて、何か伺つてようやくOKとなつた。交渉には城戸さんが当たつたと聞いています。これらの建物も傷みが激しくて、特に3階の奥の座敷は使用されていなかつたこともあり状態が良くなかった。同じように、表側の2、3階の部屋も元の姿とは違います。外観は復原できたのですが。

一ゴシック建築が専門の先生が和風住宅にも関わっていたのは興味深いですね。ちなみに解体や移築、復原の費用はどこが出したのですか？

解体費は所有者や地元の団体が、復原費は明治村がもつことが多く、輸送費は割いたため、その間に壊されてしまった建物も少なくありませんでした。

ただ、開村から3年目に帝国ホテル(※図7)

の話が来て、そちらへ人員と労力と費用を割いたため、その間に壊されてしまった建物も少なくありませんでした。



## 復原の要となるもの

一それで、いよいよ復原となるのですが、先生が復原に際して重視されたポイントはどこだつたのでしょうか？

まず委員会で重視したのが、古い部分を大事に残す、というルールでした。その上で、私が重視したのは見栄えです。とにかく外観も内装も古いものにするということを考えました。これはフランスで学んだ影響もありますが、それ以上に工期やコストのことが大きかった。適切な指示がなされないまま送られてきた部材では、構造や材料などを元の姿に再現することが難しかったのです。むしろほとんど新築するような作業となり、時間もお金もかかりました。

でも本当は、きちんと調査して丁寧に解体し復原して残すとなると、お金も時間ももつとかかります。

一フランスの文化財保存の学校では工事予算

など経理についても教えられるのですか？

私が在籍した講座では修復を担当する学科があつて、難しい試験もあつた。それに合格すると「文化財の建築家」(※注⑧)という特別な存在となつて、県や市町村の長とともに、新築や修復も含めて街並みを守るための相談役となることができました。私は留学中に文化財の建築家の事務所で働き、実務や経理はそこで学びました(※図8)。

日本ではまだそういう建建築家は少ないですが、これから必要になってくると思いまし、私はこれが本当の建築家の姿だと思っています。

一先生は、旧東京帝国大学の航空科から建築科に移られたのですよね。

そもそもゴシック建築に感銘を受けて保存に行こうと決めたのですが、当時そういった文化財が重要であることをはつきりいえたのはフランスだけでした。ですから、日本からわざわざフランスに学びに来た

注⑧：文化財保護事業部主任建築家



図8：飯田先生留学時代の写真(右隣がウォーリー先生と修復中の教会堂の写真)

ことに大変敬意を払われましてね。留学生ですから試験に受かっても文化財の建築家にはなれないのですが、とても大事に扱ってくれた。そういうことを含めて、文化を守ること、学ぶことの大切さをしみじみ感じました。

「では歴史ある建築を残すという信念も、そこに起因するのでしょうか?」

フランスでは文化財保存の原動力は民衆です。そこに火をつけるのは文化財の建築家の役割です。歴史ある建築は、過去の時代のその時にしかないものです。ですからそれは、どうしても残さないといけない。

フランスでは一般の人々にもそれが浸透していて、文化財をもつのは彼らの権利だと考えています。そのため、お金の確保も民衆から自然に集まってくる。また文化財を大切にする研究者を育てる重要性についても、よく理解されていました。そういった関係性を肌で感じて、これは素晴らしいことだと確信しました。

復原に際しては外観と見栄えが大事なポイントになりますが、各々の建物によってつなぐ方法やディテールが違うため、詳細についてはそれぞれの建物に関わった人しかわからない部分が多いです。

一方で、解体の指示も担当者に委ねられます。また、解体した大工が復原を担当するという原則もありましたが、実際には難しかった。私が担当した聖ヨハネ教会堂や聖ザビエル天主堂は、解体の指示をした上で移築することができたのと、復原の設計方針を委員会で詰ったときもすんなりOKが出たため、あまり苦労しませんでした。その辺りはフランスでの経験が生きたと思います。また谷口さんのように、実際

に建物を設計してきた建築家も適切な指示が出来たと思います。

それができなかつた場合は、新しくつくり直すことになります。

「その後の流れについてもお聞かせいただけますか?」

その後は担当委員の指示のもとで職員が動き、施工は建設会社が作業にあたります。

先ほども触れましたが、復原に明確な形式ではなく、それぞの建物で状態が違いましたから、とにかくやれる範囲から修復に向き合っていました。

まず使える部材とダメな部材を分け、材を整えてから足りないものを足して復原していきます。そして分からぬ部分は担当委員が決めていく流れとなる。そもそも画面も写真もない状況で始まるので、

調査の時に担当者や職員が現地で写真を撮り、スケッチをして図面に起こしていくました。

ところで解体された部材は、可能な限り大きな塊で運びました。実際には使えなくとも調査して復原に役立つことが

## 創建時に戻された聖ヨハネ教会堂

「先生が移築と復原に関わった聖ヨハネ教会堂について、お話しいただけますか?」

聖ヨハネ教会堂は元は京都の河原町にあった建物ですが、実は私は見に行っていないんです(笑)



図9：帝国ホテル旧本館の柱



聖ヨハネ教会堂

定礎石の中から設計図や竣工当時の写真、聖書などが発見され、当初の姿に戻すことを委員会に諮ったという経緯があります。

具体的にいうと、外観正面のトレーサリー（※注②）が改築されて3連のものだった（※図10）のを4連に戻し、時間はかかりましたが、ステンドグラスも平成11年に復原しました（※図11）。

ステンドグラスの復原ですか。どうやるのでしょうか？

そもそもこの教会堂は、窓やステンドグラスの多くが台風の被害でほとんど壊れてしまつて、違う形で修復されていました。そのため、かたちについては発見された当初の図面から復原し、色に関しては、無事だつたガラスを集めて昔の姿の残された窓が1、2カ所あったので、それを参考に復原してあります。

普通、ステンドグラスは戻せないんですよ。カラー写真が撮れるようになつたのは復原してあります。



図10：移築前のトレーサリー



図11：4連に戻されたトレーサリーと復原されたステンドグラス

注②：明治初期に大工が西洋の建築に似せて建てた建築物。

注③：「ゴシック建築に見られる窓枠の装飾のこと。」

注④：明治初期に大工が西洋の建築に似せて建てた建築物。

注⑤：明治初期の擬洋風建築の研究」。

書に明治初期の擬洋風建築の研究」。

京都大学名誉教授。

建築史家。大阪学芸大学勤務。著書に「明治初期の擬洋風建築の研究」。

戦後になりますから。その点では残されたものがあつて幸運でした。

それと、この建物はステンドグラスが空間の要になるとと思っていたので、最初からステンドグラスの職人に入つてもらいました。

一なるほど。限られた期間の中でも調査や工事を進めながら色々な発見があつて、復原につながっていくのですね。他に留意された点はありますか？

聖ヨハネ教会堂の見どころはやはり外観です。これほど華やかなものはない。ロマネスク様式（※注②）と紹介されていますが、正確には中世ロマネスク建築というよりも、むしろ19世紀のアメリカで流行したロマネスク・リバイバル（※注②）に近い。

設計者のガーディナー（※注②）はデザインが上手かったのでしょうか。ただその分装飾が多くて、傷みも激しかった。ステンドグラスが要になっていると思ったのも、やはり外観からの判断です。4連のトレーサリー



聖ザビエル天主堂

### 構造形式を変更した聖ザビエル天主堂

一聖ザビエル天主堂についてもお話しただけますか？特に、先生はゴシック建築（※注②）の専門でいらっしゃいますから、研究者からの視点も伺いたいと思います。

注②：古代ローマ文化の影響を受けた建築様式。

注③：11世紀から12世紀のロマネスク建築に着想を得た建築様式。

注④：p.24-25参照  
注⑤：12世紀後半から花開いた「ラン

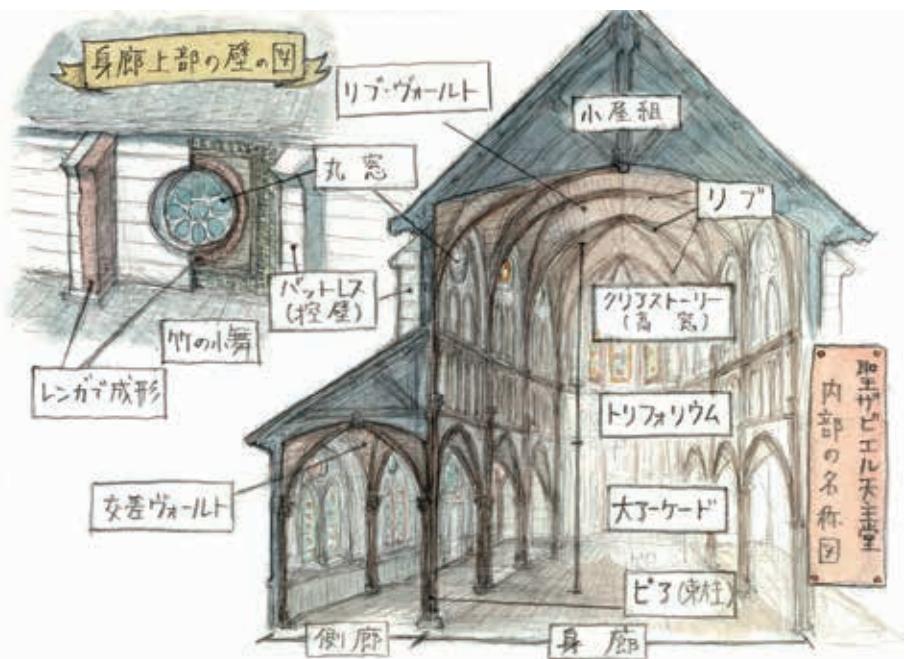
スを発祥とする建築様式。

実はこの建物はあまりゴシックっぽくないですよ(笑)外観はロマネスク建築風で、内部もトリフオリウムは木製の飾りで、正確な構成ではありません(下図参照)。

ただ細部は良く出来ていて、例えば身廊で立ち上がるピア(柱)は、束ねられた柱型が柱頭で収束し、上方のリブ・ヴォールトへつながっていて上手い。また側廊の交差ヴォールトともきちんとつながっています。

確かに外観は、全体が白塗りで石積みのような筋彫りがあつて、むしろイタリアのロマネスク建築を感じさせます。明治村に来る以前はどんな様子だったのでしょうか?

聖ザビエル天主堂も京都にあった教会堂で、河原町通の市電の沿線にたっていました。こちらは移築前に数度調査へ伺いましたが、聖ヨハネ教会堂と違つて建物はあまり傷んでいなかつた。ですから、ステンドグラスも移築して再利用できたものが多いです。それと身廊に突き出た説教壇も残つていて、当時の雰囲気や使われ方も良く分かりました。



「状態の良い建物の移築と復原に際して気をつけた部分はどこになりますか?」

構造的な部分です。木造とレンガ造の混構造なので、一番難しかったのが、身廊上部の丸窓の並ぶ壁が木造の柱の上に乗つかったことです。壁は竹の木舞で組んだ和風の壁なのですが、窓のまわりはレンガで整形されていました(右図参照)。

また壁の外側にはレンガ壁のバットレス(控壁)がついているのですが、こちらは側廊の屋根の梁の上に乗つかるという、とんでもないことをしていた。本来のゴシック建築ではバットレスは構造的な補強なのですが、こちらは飾りなのです。

これは構造的に危険なので、復原の際には木製の箱でつくり直して外観を整えました。またレンガでできていた丸窓周りも、下部はそのままとして、上部はプレキヤストコンクリート(※注<sup>(2)</sup>)に変えています。

「それはうかがわないと分からぬ部分ですね。外側からでは見えませんから。そういうた部材

の変更は、復原を考えた時に重要なポイントになるとと思うのですが。

ザビエルは建物の状態が良く、柱や柱の上に乗る桁などの木造の部材も当時のものを再利用できたので、逆に苦労しました。ただ外壁など必要なところは鉄筋コンクリートへ変えています。実際のところ、現在の法規の範囲ではレンガで壁面を復原するのは難しい。ですから、それよりも、きちんと建てて残すことを第一に考えました。

「そういった修復や復原へのスタイルが、フランスで学ばれた西洋建築の手法なのですね? はい。とにかく外の形だけはそのまま復原するという。ただ、それが要因となつて、聖ザビエル天主堂は重要文化財にできなかつたんです。文化庁は元の構造で復原しろというわけで、その意向と合わなかつたんです。ザビエルは長崎の大浦天主堂(※注<sup>(3)</sup>)に次ぐぐらいの古い教会堂で、重要文化財にならぬのはおかしいのですが。

でも実は、復原計画の段階でその覚悟

注<sup>(2)</sup>: 現場で組み立て・設置を行つたために、工場などであらかじめ製造された「コンクリート製品」。

注<sup>(3)</sup>: 幕末の開国後、元治元年に竣工した、日本に現存する最古のキリスト教建築物。1953年国宝指定。世界文化遺産「長崎と天草地方の潛伏キリシタノ関連遺産」を構成する文化財のひとつ。

はできていました。だから、建物を残すか残さないかという判断の時はヨーロッパの考え方で、耐震的な安全性などは日本の考え方でいいと思います。

一 覚悟ですか。今のお話をうかがうととても重要な変更だったことが良く分かりました。

両方の建物を比較すると、同じ教会堂でも復原への経緯がまるで違うのが印象的で、特に

現地での状態のことを慮ると、明治村へ来た当時の状況もリアルに想像できる気がします。

聖ザビエル天主堂の側廊に失われた彫像のことを紹介した銘板があります。でも、たとえ文字で情報が残っていても、そこにどんなものがあつたかは分からんんですね。所有者の思いや明治村の思いがどうであろうと、とにかく建物を残さないと何も分からない。

開村の日のこと

一 構想の発表から4年で開村した明治村です

が、その背景を振り返ると驚くべき速さだったことがわかります。オープンした当日のこと教えていただけますか？

初日のことは今でもよく覚えています。

殺到した人々を見て単純に嬉しかったですし、感慨深かった。連日テレビや新聞も来て、反響も驚くほど大きかったです（※図12・図13）。

当曰、私は伊藤三千雄さんと詰所にて、その様子を一人で見ていました。谷口さんははじめ建築委員会のメンバーもお客様の多さに感激していたと聞いていますが、来客が多くて彼らとは接触できませんでした。

ただ、その一方では苦しい気分もありました。

一 それはどうしてですか？

結局分からぬところを残したまま復原したからです。それらについては細部まで全部把握しているので、オープンして良かったというよりも、やり残した気分の方が多かったです。残念なことの方が多い記憶に残りました。



図12.開村式の様子。メモリテレの「あんなのマチの秘蔵映像」では開村式の映像が公開されています。

図13.開村時のレンガ通りの様子。

ています。

それにね、産みの苦しみは相当あります。それは他のメンバーも感じていたと思いま

す。みんなでだいぶ苦労しましたから。

一 苦労が報われた瞬間はありましたか？

ないよ（笑）必ずしもいい仕事をしたか

らといって、報われるものじゃない。

これから明治村へ

一 最後に、これから明治村についてお話ししいただけますか？

それは難しいね。うーん…。

一 実は明治村の方々からも聞いて欲しいと言われていて、例えば、今後の明治村に期待したいことでもいいんですが。

…一般の人々がどう思うかということだと思います。明治村ができる以前までは、一般的の人々は明治の建築に関心がなかった。それが明治村ができてから、いつべんにお客さんが殺到するようになつた。その影響



もあって調査や研究も進み、また近代建築の保存や活用への意識も広がつた。明治村は大変な役割を果たしました。

そういう意味では当初の目的は果たせたのです。やれるだけのことはやりきつた。

一 驚きました。普通は目的を果たせたとはなかなか言える

ものではないですよね。確かに…いや、何といっていいのか。

感激してしまって、言葉もありません。

ですから、これからはあなたたちが文化財を活用する場として、新しい役割を探さなくてはならない。

一 新しい役割ですか…それでは、まずは明治村を世界遺産にするとかどうでしょうか？

それは悪くないね（笑）

## 明治村の生みの親 谷口吉郎



博物館明治村の創設に大きな役割を果たした建築家の谷口吉郎（1904–79）は、金沢の九谷焼の窯元の家に生まれました。頭脳明晰で文才もあり、处女作の「東京工業大学水力実験室（1932）」は、当時ヨーロッパで最先端だったモダンデザインをいち早く取り入れた名作として知られています。

また文化全般に造詣が深く、文化勲章の選定委員だったこともあり、それらで得た人脈が、後に明治村の構想を後押ししました。

「明治村」という名称も谷口の提唱によるもので、建物の配置計画についても、谷口と建築委員会の担当者が相談して決めました。当初は敷地が狭かったこともあり、良い場所は担当者同士で取り合いになりましたが、聖ヨハネ教会堂に関しては外から目立つ場所だったこともあり、すんなり決まったそうです。ちなみに、明治村2丁目の東山梨郡役所に向かう街並みや「レンガ通り」の名称も、谷口のアイデアです。

明治村ができた昭和40年代には、谷口は愛知県に頻繁に訪れていて、その間に「名古屋大学古川図書館（現名古屋大学古川記念館）（1964）」、「名鉄バスター・ミナル（1967）」、「料亭河文水鏡の間（1973）」、「愛知県陶磁資料館（現愛知県陶磁美術館）（1978）」などの建物を手がけています。

# 洋風建築

地中海を中心に広くヨーロッパ圏で発達した建築を「西洋建築」という。

また、の中でもアカデミックな機関で研究されたり、

過去の歴史や地域性を取り入れて確立されたデザインを「様式建築」という。

それら西洋建築の影響を受けた「洋風建築」が、幕末以降の日本を彩った。



photo: Akihiko Mizuno



明るい会堂。みつば形アーチの小屋組も隅々まで見える

たデザインは、自由で軽やかな雰囲気を感じさせますが、聖ヨハネ教会堂にもそんな気分が漂っています。

設計を担当したガーディナーは、ハーバード大学で建築を学んだのちに立教大学の校長になるために来日し、以後45年に渡って宣教師や教育者、建築家として活躍しました。立教大学の校舎をはじめ、全国に教会や学校などの建物を手掛けましたが、今ではその多くが失われています。

**復原された姿**

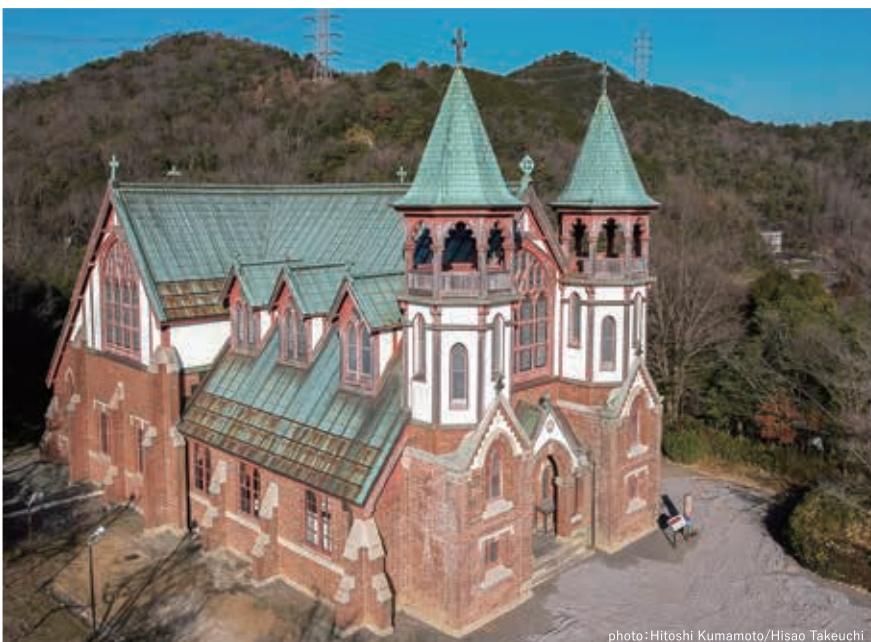
ところでの聖ヨハネ教会堂は、度重なる改修と自然災害による老朽化でボロボロの状態でした。しかし、この聖ヨハネ教会堂は、改修によって元の姿を取り戻すことができました。改修によって、木造の柱や梁が強化され、耐震性が向上しました。また、外観の赤レンガと白い窓枠が、古風な外観を保つことができました。

聖ヨハネ教会堂が気持の良い場所で佇んでいます。改修によって、建物が残された幸運に感謝します。聖ヨハネ教会堂が丘の上に復原されたことは、採光の点からも幸運だったと思います。

ところで、2階が木造で大きな屋根裏のようになっているのは、耐震性を考慮したからとも考えられ、屋根材が金属板なのも軽量化のための工夫と見ることができます。



オルガンを美しく照らすステンドグラスの光



賑やかな外観。正面の双塔や、2階の十字形平面の三方に開く大窓、側廊の屋根窓など、遠目からでもよく目立つ

## 聖ヨハネ教会堂

清らかな光に溢れる、明治村のランドマーク的な教会堂

### ノスタルジックなランドマーク

小牧側から入鹿池へ通じるのどかな道を進むと、小山の中腹に双塔のある赤いレンガ壁と緑青色の屋根の建物が見えてきます。ノスタルジックな佇まいを遠目に見つけると、いよいよ明治村に近づいた感じがして胸が高鳴ります。聖ヨハネ教会堂は、そんな明治村のランドマークのような建物です。



レンガで構成された尖頭アーチの玄関

### 京都市電沿いの教会堂

聖ヨハネ教会堂は、京都の街中にプロテスrant系の教会堂として建てられました。移築前は路面電車の走る沿線にファサードが迫っていて、華やかな姿が街並みを彩っていました。特徴的な外観は、中世ヨーロッパに端を発するロマネスク様式を彷彿とさせます。西洋建築史の中で様式Ⅱスタイルとして確立され

1907年(明治40年)／1964年(昭和39年)移築  
1階レンガ造、2階木造／1階鉄筋コンクリート造、2階木造  
【設計】McD.ガーディナー  
【旧所在地】京都市下京区河原町通五条下ル



photo:Akihiko Mizuno/Hisao Takeuchi

## 西郷従道邸

名実ともに明治時代を代表する、瀟洒な洋館

**エレガントな洋館**

明治村の中でもっとも有名な洋館といえば西郷従道邸でしょう。芝の前庭に張り出したベランダにはレースのよだれ軒飾りや装飾のある手摺りが付き、優雅な姿を見せています。また、傍らに植わるシュロがベランダの柱と連続して見え、異国のような情緒を感じさせてくれます。

明治初期には、このようなベランダのついた建物が数多く建てられ、南方の植民地を経由して入ってきたことから「ベランダコロニアアル様式」と呼ばれています。

### 偉人の邸宅

この邸宅の主人の西郷従道は、西郷隆盛の実弟で、陸海軍や内務省の大臣を歴任した明治政府の要人です。また海外視察の経験もして入ってきたことから「ベランダコロニアアル様式」と呼ばれています。

西郷従道邸は、建物としても主人の重要性も申し分のない、まさに明治村を代表する名建築のひとつといえます。その一方で、奇妙に小さい入口や、2階ベランダがいつ増築されたかなど謎も残っています。また、西郷従道についても、その人物像はつかみ所がなく、建物と同様に汲めども尽きせぬ不思議さを抱えています。

西郷従道邸には耐震性に留意した工夫が施されていて、例えば屋根は軽量化のために垂木を抜いて洋小屋（トラス）に銅板をのせ、また外壁の間には1mくらいの高さにレンガを積んで建物の浮き上がりを抑えています。

そんな構造的な工夫が、軽やかでエレガントな佇まいに一役買っているのです。

### お雇い外国人レスカス

豊富で、西欧の制度の導入に尽力し、外交官や国内外の客を招くために、約2万m<sup>2</sup>の広大な敷地にこの洋館を建てたといいます。明治22年には明治天皇も訪れ、ベランダから相撲を見たと伝わっています。

戦後になると広大な敷地は国鉄が所有し、洋館は構内の隅へ移されてしまいましたが、明治村建築委員会の働きかけで移築されました。

西郷従道邸の設計は、フランス人のレスカスが担当したといわれています。レスカスは鉱山や地盤調査のお雇技師として働いたのちに、神戸と横浜で建築設計事務所を開設しました。

また、日本建築の耐震性を研究し、重い瓦がのる欠点やレンガ壁に帶鉄を入れて補強することなどを論文にまとめて、フランスの土木学会誌に発表しています。

西郷従道邸には耐震性に留意した工夫が施されていて、例えば屋根は軽量化のために垂木を抜いて洋小屋（トラス）に銅板をのせ、また外壁の間には1mくらいの高さにレンガを積んで建物の浮き上がりを抑えています。

そんな構造的な工夫が、軽やかでエレガントな佇まいに一役買っているのです。

### インテリアの美



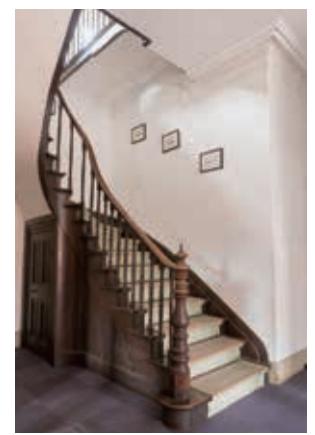
1階書斎。窓から入る光が室内を彩る



鹿鳴館で使用された桜蒔絵小椅子

もうひとつ、忘れてならないのがインテリアの美しさです。鹿鳴館で使用された桜蒔絵小椅子などが置かれ、明治時代の迎賓施設の雰囲気をかもし出しています。またカーテンの中廊下を軸に配置された各部屋では、時間によって窓から入る光が変化することで、美しい瞬間が生み出されています。

1880年(明治13年)／1964年(昭和39年)移築  
木造2階建  
「設計」J・レスカス  
「旧所在地」東京都目黒区上目黒



漆喰の艶かしい曲線が美しい階段



ドイツ・バロック様式を抽象化したシンプルな外観

必死の消防活動で類焼を免れたという逸話も残されています。

**ドイツ風デザインの混在**

2丁目のレンガ通りからは、少しはすに構えた北里研究所本館の尖塔がよく見えます。塔の高さは20m以上あり、背の高い屋根の上

から空へ伸びる姿がひときわ目をひきます。建物に近づくと萌黄色の下見板が水平に広がり、土台のレンガと軒下の漆喰、天然スレートのマンサード屋根の取り合わせが、清廉で品のある佇まいを感じさせます。また壁面を構成する付柱と付梁の意匠は、ドイツ・バロック様式風の外観をかたちづくっています。

一方で、正面の上部にある階段状の妻飾りや、車寄せの柱、玄関の木製扉には、当時ヨーロッパで流行していたアールデコやゼツエッシュヨンなどの新しいデザインの影響が感じられ、モダンな印象も漂わせています。

**研究室と展示空間**

かつての北里研究所本館・医学館は南を向き、「L字型」の平面をしていました。明治村へは左翼の突き出た部分を除いて移築され、建物は南北を向いています。スケールの大きな諸室には窓が多くあけられ、特に以前北側だった部屋は、実験や研究のために安定した光を取り込めるよう配慮されています。

現在、建物内では顕微鏡などが展示され、北里柴三郎を始め、研究者たちの業績を包括的に知ることができます。このような展示を通じて明治時代の偉業を学ぶことができる



1階展示室の顕微鏡

1915年(大正4年)／1980年(昭和55年)移築  
木造2階建で  
「旧所在地」東京都港区白金



感動的な屋根裏空間。屋根の中央には塔が載るため、より複雑な木組みとなっている。窓からの光が美しい(通常非公開)

photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

## 北里研究所本館・医学館

清廉なデザインが美しい、ドイツ・バロック風の洋館

### 日本医学界の記念碑

明治になって以降、日本は西洋の文明を移入して飛躍的な発展を遂げました。あらゆるジャンルに及んだ変革の中でも、とりわけ医学は成果を上げ、「日本近代医学の父」と呼ばれた北里柴三郎は、細菌学の研究で世界的な業績を残しました。破傷風菌の純粹培養や血清療法の確立は、ペスト菌の発見とともに、人類の歴史にその名を刻む重要な仕事だったといえるでしょう。

北里研究所本館・医学館は、そんな北里が創設した私立の研究所で、医学界における記念碑的な建物です。関東大震災や太平洋戦争などを乗り越え、空襲の折には研究者たちの



尖塔とマンサード屋根、妻飾りのディテール



渡り廊下も魅力的な空間

神戸居留地と六甲山麓の雑居地  
神戸が開港されたのは慶應3年のことで、中国や東南アジアとの貿易を通じて繁栄しました。その一方で、居留地の整備が開港に間に合わず、外国人たちは六甲山麓に向かう田園地帯へ住まいを求めました。

神戸山手西洋人住居のあった山手には、明治20年代くらいから多くの洋館が建てられるようになり、旧ハンター邸などの重要文化財もこの時期のものです。昭和30年代後半になって、これらの洋館に取り壊しの話が持ち上がり、旧ハンター邸は近郊の公園に移され、神戸山手西洋人住居は明治村へ移築されることになりました。

### 渡り廊下の先の和室

ドアを開くと、少し斜めにズレた短い渡り廊下が架かり、その先には開放的な和室が広がっています。和室には大きな床の間や満月を模した窓など凝った意匠が設えられています。

神戸の洋館では主屋と付属屋を組み合わせた建物が典型的となっていて、渡り廊下から付属屋の2階に渡る洋館もわずかに現存しています。おそらくこれは主人と使用人の空間を分けた工夫で、和室は主人の接客空間だった



付属屋2階の和室。満月の窓が風雅

明治20年代／1969年(昭和44年)移築  
木造二階建／付属屋付き  
「旧所在地」神戸市生田区山本通

### 神戸居留地と六甲山麓の雑居地

神戸が開港されたのは慶應3年のことで、中国や東南アジアとの貿易を通じて繁栄しました。その一方で、居留地の整備が開港に間に合わず、外国人たちは六甲山麓に向かう田園地帯へ住まいを求めました。

神戸山手西洋人住居のあった山手には、明治20年代くらいから多くの洋館が建てられるようになり、旧ハンター邸などの重要文化財もこの時期のものです。昭和30年代後半になって、これらの洋館に取り壊しの話が持ち上がり、旧ハンター邸は近郊の公園に移され、神戸山手西洋人住居は明治村へ移築されることになりました。

### アクロバティックな室内構成

ベランダから建物へ入ると、中心に廊下が通り、片側には2階へ上がる階段があります。廊下の両側には部屋が配置され、大きなフランス窓からベランダへ出られるようになっています。狭い室内ですが、窓のおかげで明るく開放的な空間となっています。また、2階も同じような間取りになっていて、窓の先には入鹿池の眺めが広がっています。

ところで、2階には外に出る不思議なドアがあります。その先は渡り廊下となっていて、洋館の後ろにある付属屋とつながっています。不思議なのは、付属屋の2階へはここを渡らないと辿り着けないのです。

と考えられています。

明治時代の暮らしの変革は、当時の人々にとつて手探りだったことが、このような不思議な構成の住宅からもうかがい知ることができます。



古典主義建築風のベランダ。左右非対称を感じさせない巧みな構成。後ろに見えるのが付属屋



ベランダの柱頭のディテール

## 神戸山手西洋人住居

ベランダのデザインが美しい、渡り廊下のある洋館

### 古典主義デザインの妙味

明治村には小ぶりながら不思議な魅力をもつ建築があり、とりわけ神戸山手西洋人住居は、それを巧みな古典主義建築風のデザインで包んだ興味深い建物です。まず外観を前にして目をひくのがベランダです。柱や手すり、大きな窓と水平の装飾帶が秩序のある構成を感じさせますが、よく見るとベランダはL字型に配置され、柱の間隔も不均一です。また角柱の数もコーナーと正面入り口、その合間とで異なっており、全体が左右非対称であることに気づくでしょう。これは古典主義建築のデザインのテクニックで、敷地など状況に恵まれない建物にも優雅さや品格を与える優れた手法です。神戸山手西洋人住居は、このベランダのおかげで美しい姿を獲得しています。

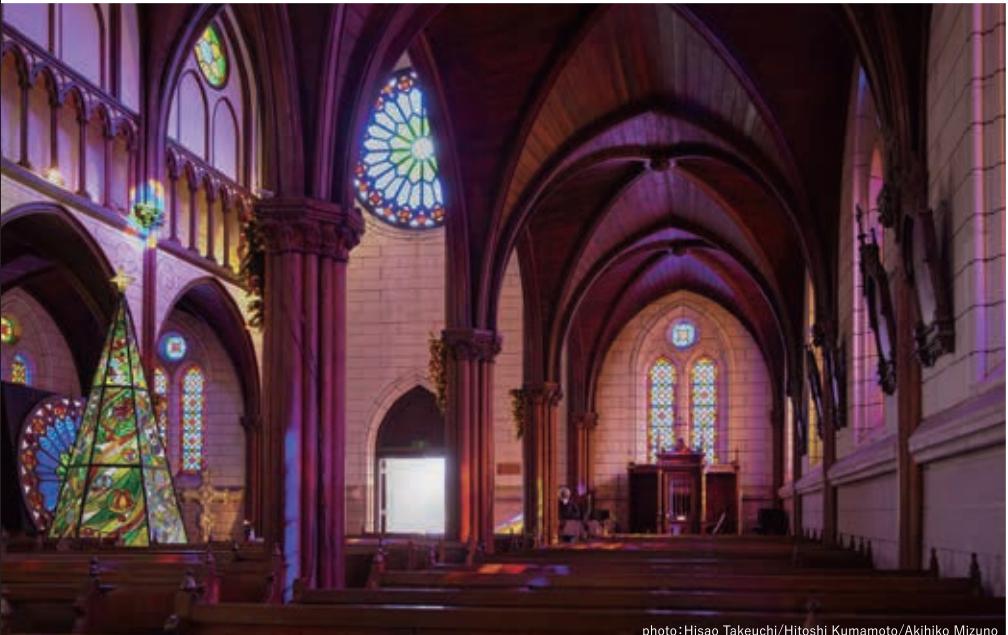


photo: Hisao Takeuchi/Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

## 聖ザビエル天主堂

ゴシック建築の大家が復原に携わった、白亜の教会堂

ほの暗い堂内に浮かび上がる色とりどりの光に、伸び上がるような上昇感。複雑に絡みあう柱の束が林立する荘厳な空間と、それらを組上げる構造的な工夫。12世紀のフランスで生み出されたゴシック建築は、明治以前の日本には無かつた建築美をたたえています。5丁目の小高い丘の上にどつしりと佇む聖ザビエル天主堂には、いつも大勢の人が訪れます。ステンドグラスの光に圧倒されて歓



木造とは思えない威容。かつて壁面はレンガ造だった



ステンドグラスのディテール

声を上げる子どもたちや、夢中になって写真を撮る若いカップルなど、劇的な空間に魅了された人々が思い思いに建物を楽しんでいます。

### 京都に白い伽藍があったとき

聖ザビエル天主堂は、聖フランシスコ・ザビエルに捧げられた教会堂で、京都の河原町にパリのカトリック教会の資金で建設されました。それに伴い図面もフランスから送られましたが、土地の事情などから手を加え、寸法も日本の尺度に直されました。それを担ったのは、建築に造詣の深いパピノ神父だったと伝わっています。

白色の大きな外観には石積みのような筋彫りが施され、堅牢な佇まいを見せていますが、この建物の構造は木造とレンガ造になります。外観はイタリアのロマネスク建築を思

わせ、かつては京都の街並みでもひときわ目をひいたことでしょう。また、中央に浮かぶ薔薇窓のステンドグラスも印象的です。以前はこの薔薇窓の窓枠も木製でしたが、現在は金属で復原されています。

### 魅惑の内部空間

堂内に足を踏み入れると、ステンドグラスの美しい光が目に飛び込んできます。窓の数以上に光を感じるのは、薔薇窓をはじめ、あらゆる壁面に色とりどりのステンドグラスがはめられているからです。透過した光が室内に映り込むため、いつそうドラマチックに感じられるのです。

垂直に伸び上がるような空間は、身廊に林立する背の高い束柱が担っています。その束柱が天井まで伸び、隣り合う束柱へとつながっています。また天井の筋はリブといい、交差するリブで構成された天井を交差リブ、ヴォールトといって、ゴシック建築ではとても重要な要素となります。

他にも、身廊をクリアストーリー（高窓）、トリフオリウム、大アーケードの3層に分けたもの、ゴシック建築の特徴で、西洋建築ではこれらデザインを様式化スタイルへ昇華させ



内陣の天井。束柱とリブの構成に注目

1890年(明治23年)／1973年(昭和48年)移築  
木造、一部レンガ造、木造、一部鉄筋コンクリート造  
〔設計監修〕江口「パピノ」神父  
〔旧所在地〕京都市中京区河原町三番

て、建築文化を醸成してきた歴史があります(p.18参照)。

### 建築修復家 飯田喜四郎

この建物の移築と復原を担当したのは、建築史家・修復家の飯田喜四郎です。ゴシック建築の本場で実務経験を積んだ研究者が手掛けた聖ザビエル天主堂は、建築修復の優れた作品としても見ることができます。

明治村の建物に感激したときに、それを復原、修復した人々に想いを馳せるのも、建築の通な楽しみ方です。



photo:Akihiko Mizuno/Hisao Takeuchi

# 内閣文庫

明るく軽やかな外観が美しい、明治末期の古典主義様式の建築

## 様式建築の習熟

明治の建築の歴史は、西洋の様式建築の移入と習得の歴史とも言い換えられ、それらを形成する様式＝スタイルの習熟は、日本の建築家にとって最も重要な課題でした。内閣文庫は、そんな様式建築の習熟を示す明治末期の建物です。巧みに構成されたファサードは、ルネサンス様式の厳格さを残しつつ軽やかに仕上げられた見事なデザインです。また、政府の中央図書館という用途に従い堅牢性が重視され、デザインを抑えている点も重要なポイントです。

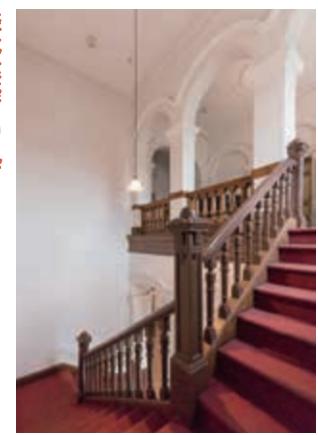
## 皇居の中の図書館

そもそも内閣文庫は、徳川家ゆかりの貴重な書籍を管理するために、赤坂離宮内に置かれていました。また、事務室や閲覧室などの各部屋の装飾も控えめなため、不思議な親しみやすさを感じます。

内閣文庫は、元は3階建ての書庫が併設してあり、明治村へは本館と事務棟のみが移築されました。また小高い丘から臨む場所に配置されたため、まるでヨーロッパの郊外住宅のような趣ぎがあります。

内閣文庫の外観が明るく軽やかに感じられるのは、そんな印象も影響しているのかも知れません。

内閣文庫の外観が明るく軽やかに感じられるのは、そんな印象も影響しているのかも知れません。



階段の吹き抜け。連続するアーチが楽しい



旧事務室。繊細なミニチュア建築が展示されている



響き合う造形がハーモニーを生む

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

明治村へ移築された内閣文庫は、明治が終わる前年に皇居東御苑の大手門近くに建てられました。設計したのは大蔵省臨時建築部の大熊喜邦で、後に国会議事堂建設の指揮をとった人物です。

温厚な人柄で学識も高く、江戸時代の建築の研究にも打ち込んだ大熊は、国会議事堂の計画や関東大震災後の復興事業を担った大蔵省臨時建築部の黄金期を支えた大黒柱でした。

明治村へ移築された内閣文庫は、明治が終わる前年に皇居東御苑の大手門近くに建てられました。設計したのは大蔵省臨時建築部の大熊喜邦で、後に国会議事堂建設の指揮をとった人物です。

温厚な人柄で学識も高く、江戸時代の建築の研究にも打ち込んだ大熊は、国会議事堂の計画や関東大震災後の復興事業を担った大蔵省臨時建築部の黄金期を支えた大黒柱でした。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

明治村へ移築された内閣文庫は、明治が終わる前年に皇居東御苑の大手門近くに建てられました。設計したのは大蔵省臨時建築部の大熊喜邦で、後に国会議事堂建設の指揮をとった人物です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

内閣文庫はそんな大熊が入省して間もない頃に手がけた建築です。

透明な空間  
館内に足を踏み入れると、少し違和感を感じます。

1911年(明治44年)／1990年(平成2年)移築  
レンガ造・石造／鉄筋コンクリート造・一部石造  
〔設計〕大熊喜邦  
〔旧所在地〕東京都千代田区千代田



# 学校

## それ以外の洋風建築1

ともいうべき学問でした。  
見どころは背の高い中央部にある階段教室で、迫力ある段の勾配や天井高、採光などが理論的な裏付けに基づいて設計されています。設計者の山口半六と久留正道は、文部省の技師として数多くの建物を手がけ、久留が著した「学校建築図説明及設計大要」はその後の学校建築の基礎を築きました。ところで、明治村創設の功労者である谷



第四高等学校物理化学教室の階段教室



第四高等学校武術道場「無声堂」

口吉郎と土川元夫は第四高等学校の同窓生で、この建物と「無声堂」の移築にとても熱心だったそうです。



広々とした「無声堂」の内部空間。手前側が柔道場で奥側が剣道場

静まり返った道場に足を踏み入れると、予想以上に大きな空間に圧倒されます。道場が広いのは洋小屋が用いられているからです。また柔道場の床下にスプリングを入れるなどの工夫が施されている点も興味深いです。そして、奥の弓道場にある茅葺きの的是、森の風景とつながって見え、この武道場を一層神秘的に感じさせてくれます。



明治村には様式建築の他にも素晴らしい洋風建築が移築されています。

それらの建物は、いずれも新しい時代をあらわすシンボルでした。

ここではそんな建物を「学校、病院、監獄、灯台」に分けて紹介します。



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

三重県尋常師範学校・蔵持小学校。正面玄関のアーケードのような空間に、レース状の装飾の影が落ちる様子はとても優雅

## 三重県尋常師範学校・蔵持小学校

明治政府にとって、西洋にならった近代的な教育制度の整備は急務の課題でした。それは明治5年に発布された「学制」からもうかがうことができます。

三重県尋常師範学校は、小学校教師の学校として建てられ、その後移築されて蔵持小学校に転用されました。設計者の清水義八は三重県庁舎を手がけた大工出身の建築家で、破風やベランダに洋風のデザインがあしらわれています。

見どころは正面玄関で、トスカーナ式の柱の途中に架かる扁平なアーチから装飾が垂れ下がり、奥に見える廊下と合わせて、ヨーロッパのアーケードのような雰囲気をかもし出しています。

### 第四高等学校物理化学教室

2丁目のレンガ通りに面した第四高等学校物理化学教室は、とりわけ興味深い建物です。当時、物理や化学は花形



第四高等学校物理化学教室の外観



## それ以外の洋風建築 2 病院



日本赤十字社中央病院病棟の病室。廊下の光が美しい

### 日本赤十字社中央病院病棟

日本赤十字社中央病院は、明治政府がジュネーブ条約に加盟した折に、皇室からの寄付で建設されました。設計は宮内庁の技師で赤坂離宮を設計した片山東熊が手がけています。移築された建物は中庭を取り囲んで配置された8棟の病棟の一つで、棟に3つ立ち上がる換気塔や、軒先の飾り、ハーフティンバー

を模した外壁などが印象的な姿を見せて います。病院建築は換気に配慮して設計されて いるのも特徴です。

この建物の見どころは南側の廊下です。前面がガラス窓で構成された廊下には光が降り注ぎ、とても明るい空間になっています。実は この廊下は本来北を向いていて、今の姿は移築 の際に反転させてできた偶然の産物なのです。



### 名古屋衛戍病院

名古屋衛戍病院のシンプルな外観

日本赤十字社中央病院のすぐ近くには、名古屋衛戍病院の病棟と管理棟があります。かつて名古屋城に置かれた陸軍の名古屋鎮台に属する病院で、隣接する歩兵第六聯隊兵舎も同じく名古屋鎮台の建物です。

こちらの病棟は瓦が葺かれた装飾の無いすつきりした建物で、漆喰塗りの大壁に開けられた上げ下げ窓が唯一の洋風のデザインであります。病室をベランダがぐるりと囲む姿も、どこか和風建築の感じが漂います。

吹き放ちの空間とケレン味のないデザインは衛生的で明るく、ほぼ同じ配置だった日本赤十字社中央病院とは異なる趣きをたたえています。



名古屋衛戍病院のベランダの大壁と洋風の窓



photo: Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto / Hisao Takeuchi

日本赤十字社中央病院病棟の南側廊下。移築の際にガラス窓側が南に向いたことで、明るい光が降り注ぐ

### 医療の発展と病院

一般の人々にとって、もっとも身近に感じられた明治の変革は、医療の発展だったのかかもしれません。そもそも江戸時代には病院という言葉がありませんでした。

それが変わるきっかけとなったのは、戊辰戦争で負傷兵たちの治療にあつた外国人医師たちで、彼らは西洋医学を広め、病院を設立して、医療の発展に貢献しました。

明治時代、多くの人々が病気やケガから救われたことは、きっと何よりも新しい社会の恩恵として感じられたことでしょう。



日本赤十字社中央病院病棟の外観。棟の換気塔に注目



# それ以外の洋風建築③ 監獄



## 前橋監獄雑居房



前橋監獄雑居房の内部の眺め。差し込む光が美しい

前橋監獄の雑居房は、江戸時代の牢獄とイギリス式の監獄の形式が混ざった、面白い建物です。約10cm角の角材が房を鳥籠のよう圍う形式は江戸時代の牢獄の姿で、越屋根がのり切妻屋根の小屋組はクイーンポストトラス風の洋小屋となっています。

格子が並ぶシンプルな外観は現代建築的な美しさをたたえ、また越屋根から漏れる光が小屋組を浮かび上がらせる姿は、神秘的な気配すら感じさせます。

一方の金沢監獄の看守所と監房は、前橋監獄雑居房と比べると洋風化が進み、設備も構



金沢監獄中央看守所・監房の外観。見張り櫓に注目

## 金沢監獄正門



金沢監獄中央看守所の内観。柱がなく監房全体を見渡せる

最後に、金沢監獄正門をご紹介します。レンガの壁と石のストライプが目をひく

ネオ・ルネサンス様式の門は、看守所や監房とともに「監獄建築家」の異名をとる山下啓次郎が手がけました。名古屋にある名古屋市市政資料館（旧名古屋高等裁判所）も山下によるもので、こちらも厳格さと華やかなある美しい建築となっています。

## 金沢監獄中央看守所・監房



ネオ・ルネサンス様式の巧みな構成が美しい金沢監獄正門。同じ様式の名古屋市市政資料館も併せて見たい



現代建築を思わせる前橋監獄雑居房の外観。棟の上にのるのが越屋根

**法の整備と司法省の建築**  
憲法の策定や法令の施行は、近代国家を目指す明治政府にとって最重要の事案でした。それらをつかさどる司法省の建築は、一般の人々はほぼ触れる機会はありませんでしたが、威厳と風格、時に恐ろしさを備えた併まいから、国の根幹をなす重要な施設として考えられたことがよく分かります。

# それ以外の洋風建築 4 灯台



菅島燈台附属官舎

## 品川燈台

入鹿池へ突き出た3丁目の岬に佇む品川燈台は、現存する日本最古の洋式燈台です。元は品川沖の人工島にあつたため、小ぶりな姿をしています。設計に携わったフランスの建築技手フロランは、長崎や兵庫の造船所のドック建設にも参加しています。

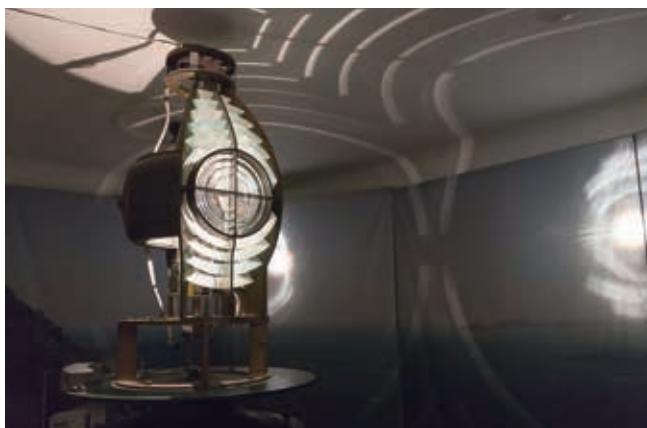
品川燈台の特徴は、なんといつもかわいいかたちです。小さなドアのすぐ上に灯室とレンズが見えるディフォルメされたような姿は、まるで絵本の中の灯台そのものです。

そんな愛らしい灯台ですが、その灯りは18 km先まで届いたといい、昭和32年まで東京湾を行き来する船を見守っていました。

菅島燈台附属官舎のベランダの眺め



菅島燈台附属官舎の外観。レンガとベランダのシンプルな構成



迫力あるレンズの動態展示。壁面を巡る灯りも妖しくて良い

館内では灯台の歴史が常設展示されていて、中でも神島灯台で使用されていた回転レンズの動態展示が見どころです。暗室に入ると、ゴウンゴウンと音を立ててレンズが回り出す姿は、怪奇映画のワンシーンのような不思議な迫力があります。

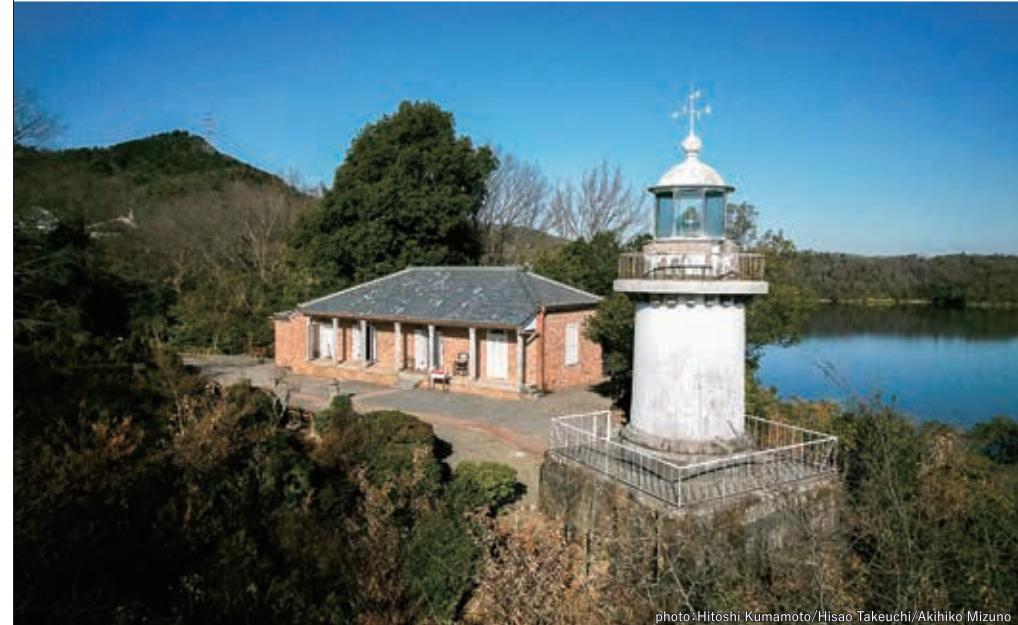


photo:Hitoshi Kumamoto/Hisao Takeuchi/Akihiko Mizuno  
品川燈台と菅島燈台附属官舎を入鹿池側から臨む。ちなみに灯台が白く塗られたのは明治17年以降のことだという



ディフォルメされたような外観がかわいい

しばしば、洋式燈台は文明開化の象徴といわれます。沿岸の要所に燈台が置かれ、安全に航海ができるようになり、発展した港町が新しい文化の発信地になったからでしょう。幕末から明治初頭にかけて燈台を建設したのは外国人の技術者たちで、器材の調達から設置後の管理運営に至るまで、彼らによつて行われました。中でも菅島燈台を手がけたイギリス人土木技師のブラントンは、30基以上の燈台を建設し、横浜の居留地拡張計画や日本大通りなど日本のまちづくりにも関与した重要な人物でした。

## 文明開化の燈台

# 特別寄稿 明治村を支える人々

1

中野裕子さん(博物館明治村学芸員)



西郷従道邸の1階の室内再現。見学者は、展示されているほとんどの椅子に腰かけることができる

学芸員として建物に関する資料調査をもとに、展示や収蔵資料を活用したイベントやワークショップの企画・運営、そのほか収蔵資料の維持管理、来村者へのガイドなど普及活動も行う。

## 収蔵資料について

博物館明治村(以下、明治村と略す)には、建物と乗り物以外はないと思われているのではないでしょうか。

明治村の設立趣意書には、「(前略)明治時代の各種の歴史資料を収集管理して博物館を設置し、広く一般に公開するとともに、(中略)現代及び将来の国民大衆に歴史の指針を与えて、文化の向上に寄与することを目的とする」とあり、それに則り、建物や関連資料だけでなく、重要文化財3件を含む産業機械・



中野裕子さん

文学・音楽・家具など幅広い分野の資料を収蔵し、その数は3万点を優に超えています。

### 展示方法の転換

開村当時の明治村は、基本的には見学者は建物を外から、たとえ室内に入ることができますたとしても廊下から部屋を眺めるだけでした。2代目の閑野克館長の時には、建物一つ一つがミニ博物館。明治村はミニ博物館の集合体であると、建物の中に展示室を設けることを推し進めました。

明治村の展示に転換されたのは、バブル崩壊後、入村者数が激減していた頃です。「建物の良さを体感してもらうことが大切なではないか、洋館ならば椅子に腰かけて、和館ならば畳に座って空間を味わってもらいたい。そして、人の気配が感じられる展示を。」と3代目の村松貞次郎館長が展示方法の転換を打ち出されたのです。

とは言つても、予算はありませんでしたから、受入以来手つかずになっていた家具資料を選び、修理し展示しました。この時の展示方法を、私たちは「室内再現」と呼んでいます。この室内再現を契機に、収蔵している家具資料の調査に着手し、宮内庁書陵部で

1909年に竣工した「東宮御所(現迎賓館赤坂離宮)」に関する文書資料の調査を行い、

東宮御所創建時の家具の多くが明治村にあることが判明しました。

### 現在、そして未来

明治村にある建物は建築的に価値があるだけでなく、日本の近代化のあゆみを知ること



2022年11月にリニューアルオープンした宇治山田郵便局舎内展示

photo:博物館 明治村提供



クラウドファンディングにより修理されたリードオルガンのコンサートの様子

45

44

## 銅板プレートと 市川清作



みなさんは明治村の建物の幾つかに、銅板のプレートが掛かっていることをご存知でしょうか?これは移築銘板や修理銘板と呼ばれるもので、館内の柱や梁などの目立たない場所にひっそりとあり、また見学者が入れない場所に掛けられていることもあるため、知らない人も多いかも知れません。

プレートには小さい文字が刻字されていて、その建物に関わった人々の名前や、移築・復原とそれに伴う補強、管理上の処理などの記録が書かれています。専門的な用語も多く、また目につかない高い場所にあることも多いため、じっくり読むのは難しいかも知れませんが、建物にまつわる詳細な情報が得られる貴重な資料となっているので、見つけた時にはぜひ眺めてみて下さい。

ところで、それらプレートの工事主任の欄のほとんどに「市川清作」の名が残されています。市川は大工出身の技術者で、戦前から寺院建築などの伝統的建造物の修理に携わり、名古屋市の建築課技師や松本城の修理工事事務所長を経て、明治村建築委員会のメンバーとして招聘されました。

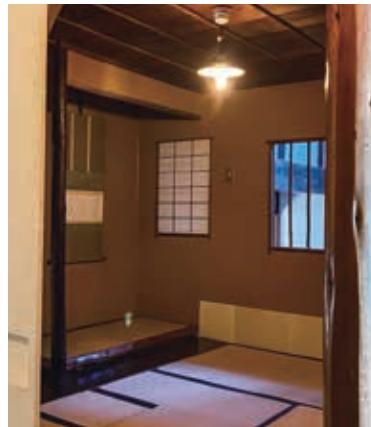
市川は明治村の工事に合わせて犬山に居を移し、ほぼ毎日現場に足を運んでいたそうです。寡黙で自らの意見を述べることは少なかったという職人気質の技術者が、明治村の建設工事に尽力していたことを、プレートは静かに称えています。



photo: Hisao Takeuchi/Ryota Murase

# 和風建築

日本は古来から独自の建築文化を持ち、  
民家、寺社、城郭、茶室などさまざまな建物をつくってきた。  
幕末から明治にかけて、近世の禁令が緩和されると、  
堰を切ったように豪華な建築が広く登場し、  
それらには西洋建築の構造やデザインの影響も見られた。



2階の茶室。窓の先の吹き抜けが青白く色づく

**豊潤な空間**

茶室のある2階を奥側へ折り返すと、3階には数寄屋風の部屋がふたつスキップフロア状に続き、高低差のある部屋同士は下地窓でつながっています。最上部は茶室のようになつていて、戸袋には滑車があり、これは水屋の役割を果たしたと考えられます。

**増改築と迷宮化**

東松家住宅は、城下町名古屋の中心を流れる堀川沿いにあった町家で、元は油問屋を営み、明治20年代後半から銀行業を開始しました。建物としては、江戸末期に創建された頃は平家で、銀行業を始めた時に建物を曳家して2階を増築、さらに明治34年に3階を増築したと考えられています。複雑な空間構成はこのような経緯とも無関係ではありません。また、正面だけ黒漆喰塗りの外観は、江戸時代の防火対策のために用いられた塗屋造という形式です。堅牢な格子窓が3階まで立ち上る姿が、銀行の重厚な雰囲気を漂わせています。

### 尾張の茶文化

建物に足を踏み入れると、奥まで続く通り土間に沿って、ミセやブツマ、奥座敷が並ぶ平面構成となっていますが、中戸の先まで進むと、3層まで吹き抜けの天井の高い空間が広がります。

よく見ると上空には斜めに張り出した渡り廊下があり、これは2階に設えられた茶室のための露地となっています。尾張地方はお茶の文化が盛んで、このような屋内に設えられた茶室で日常的にお茶が楽しめたそうです。興味深いのはその経路で、奥側の階段を上り、露地を入口側へ進むと前室と茶室に至ります。またそれらの部屋は吹き抜けに面していて、無双窓や連子窓、半月形の下地窓など趣向の凝らされた窓が目を楽しませてくれます。



東松家住宅の外観。3階建て塗屋造の堅牢な姿だが圧迫感はない。また側面は杉皮張りとなっている  
photo:Hitoshi Kumamoto

## 東松家住宅

谷口吉郎が惚れた、3階建ての町家

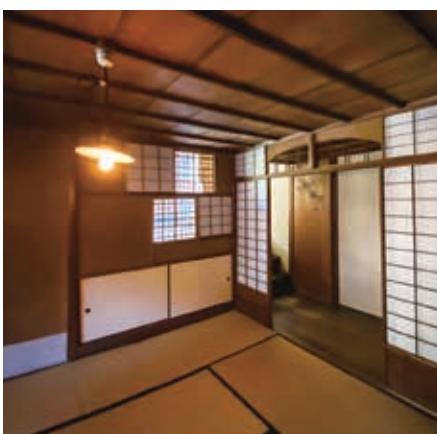
### 立体パズルのような町家

明治といえば洋風建築が注目されがちですが、実は江戸時代から続く和風建築もこの時代に大いに発展し、たくさんの名作が誕生しました。身分差による禁令が撤廃されたことで、贅沢な建築が各地で建てられたからです。東松家住宅もそんな建物のひとつで、3階建ては慶応3年頃から大正8年までの約50年の間に登場した、珍しい姿の町家です。

とりわけ面白いのが内部で、外観からは想像がつかないほど入り組んだ構成が立体パズルのよう組み合わさり、思いもよらない美しい空間を生み出しています。



通り土間の吹き抜け。高窓の光が漆喰壁に反射して明るい



スキップフロアのような3階。奥に杉戸板も見える

1901年(明治34年)／1965年(昭和40年)移築  
木造3階建て  
〔旧所在地〕名古屋市中村区船入町



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

# 清水医院

擬洋風の外観と数寄屋の内観が同居する、隠れた名作

## 小さな名作

2丁目のレンガ通りの緩い傾斜を進むと、正面に東山梨郡役所が見えます。そのすぐ脇に、蔵のような姿にアーチ窓が開けられた清水医院があります。どちらも洋風建築を模したデザインのため、東山梨郡役所に付属する建物のようにも見えますが、清水医院はその規模からは想像できない豊かな空間を内に秘めた、隠れた名作です。



診療室の風景。アーチ窓からの光が印象的

## 和洋折衷の医院

清水医院は旧中山道の宿場町須原で開業した医院で、かつてはこの建物の後ろに病棟や主屋、蔵などがたち並んでいました。宿場町の中でもハイカラだったという外観は、漆喰に目地を入れて石積みのように見せたり、またコーナーには柱形をあしらうなど洋風建築が意識され、とりわけ1階と2階で大きさも間隔も違うアーチ窓の存在が目をひきます。

その一方で、構造は木造に漆喰を塗った土蔵造りで、屋根は羽葺き、また袖壁のついた開口部は奥へ続く土間となつていて、造りや空間

構成は和風建築であることがわかります。土間から上ると待合室の奥に診察室があり、そこには医療品が並ぶ木製の戸棚や、古びた机に回転椅子、小ぶりなベッドが置かれ、あたりに日々の姿が再現されています。そこへ大きなアーチ窓から入る光が、診察室の設えを浮かび上がらせて、静物画のような美しい光景をつくり出しています。

## アーチと数寄屋

清水医院の一番の見どころは2階の座敷です。間口8・7m、奥行き5・4mの小さな空間に3室の座敷があり、それぞれ数寄屋の意匠が散りばめられています。また障子や襖を開けると、ひとつながらの明るく開放的な空間へ変貌するのも魅力です。

特に興味深いのが正面側のアーチ窓の効果です。脇の高さから立ち上がるアーチ窓が数寄屋造りの空間に不思議な景色を生み、また腰を下ろすと浮かんでいるような感覚を味わうことができます。座敷には炉が切られていことから、ここでお茶が楽しまれた様子がうかがえ、山深い旧街道沿いでこれほど趣のある座敷があつたことに、小さな感動を覚えます。

## 軽やかなファサード

清水医院の外部と内部の印象が異なるファサードからは、現代建築とも通じる表層的で自由なデザイン性を感じます。またアーチ窓から注ぐ光が内部を明るく照らし、反対に室内からは開放的な眺めが得られる点も、現在と共通する空間構成を感じさせます。

そんな清水医院ですが、移築前にはかなり手が加えられて、今に見られる姿とはかけ離れていました。そのような状態でも建物の魅力と価値を見抜いて保存を求めていた人々に改めて尊敬の念を抱かずにはいられません。



もうひとつの座敷。天井の造作に注目（通常非公開）

明治30年代／1973年（昭和48年）移築  
木造2階建〔旧所在地〕長野県木曽郡大桑村須原



湯殿と化粧室も凝った空間で見応えがある

大臣を務めた、明治後期から昭和初期を代表する政治家です。20代の頃にはフランスへ長期滞在し、パリ大学で法学を学ぶかたわらで民主化運動を目の当たりにしたり、先進的な文化人のサロンにも出入りするという、異色の経験も積んでいます。

興津へ坐漁荘を構えたのは老後のことで、政界引退後も元老として影響力のあった西園寺の元へは多くの政界人が訪れたといい、そんな来客をもてなす場としても使用されました。などの凝ったディテールが目に飛び込み、この

建築が只者ではないことを伝えてくれます。魅力的な飾り台のある畳廊下の向こうには居間があり、興津の頃の美しい庭の眺めが復原されています。ここで注目したいのが縁側の板戸です。板戸は洋間とつながり、反対側は古裂を張った設えとなつてリバーシブルで表情を変える面白いデザインとなっています。

その洋間も、不規則な梁の天井や暖炉の横に浮かぶ棚、乳白色のステンドグラス窓などが数寄屋の手つきでまとめられた、不思議な空間となっています。

趣向の凝らされた部屋の中でもっとも格式が高いのが2階の部屋です。特に欄間にはめこまれた割竹の意匠は細部技巧の極みです。そして何より、この部屋からの眺めが最高の見せ場で、西園寺が愛した清見湯の風景が現今は入鹿池で見立てられています。

その他にも、庭に面した外観にふんだんにガラスを用いたり、電気設備の導入や耐震性を考慮して鋼材を併用するなどの近代建築的な工夫も特徴です。

### 近代数寄屋建築の粋

### 女中部屋への配慮と新しい魅力

坐漁荘にはもうひとつ魅力があります。それは、女中部屋や台所など使用人たちが働く



1階の台所の風景。窓が多く清潔感がある

1920年(大正9年)／1971年(昭和46年)移築  
木造2階建  
「旧所在地」清水市興津清見寺町



北西側からの鳥瞰。紅殻塗りの板壁の先に屋根が連なり、2階の座敷が頂点となる。その向こうには入鹿池が広がっている

## 西園寺公望別邸「坐漁荘」

西園寺公望が愛した、近代数寄屋建築の傑作

### 終の住処

3丁目の高台には、明治村の和風建築の中でも異彩を放つ坐漁荘がたっています。紅殻が向かって軒を重ねる邸宅の姿が概観できます。また広い砂利道は旧所在地の東海道の眺めを思わせて、ここが明治村内であることを瞬忘れさせます。

坐漁荘は元勲と評された西園寺公望の終の住処で、煎茶に造詣の深かつた主人の趣味が行き届いた、近代数寄屋建築の傑作です。

### 最後の元老

西園寺公望は、伊藤博文らと共に大日本帝国憲法の策定に関わり、また2度の内閣総理



1階の洋間。壁面の左が古裂の貼られた板戸

特別寄稿

## 明治村を支える人々

2

石川新太郎さん(博物館明治村修理工事者)



西園寺公望別邸「坐漁莊」の復原した揉み唐紙の襖。近年、このような近代数寄屋建築の評価が進んでいる

1974年生まれ。京都大学大学院卒業後、カタルーニャ工科大学へ留学。博物館明治村へ勤務後は芝川又右衛門邸の移築復原工事をはじめ、多くの建物の修理工事に携わる。近年、修理工事を担当した西園寺公望別邸「坐漁莊」が国指定重要文化財に指定された。

### 修理技術者として

私は明治村に勤める前、スペインのカタルーニャ工科大学に留学していました。もと京都大学大学院では、歴史的建造物に対する構造補強に関して実験を中心とした研究を行っていました。卒業後は、海外の歴史的建造物保存について、より広く学びたいと思い、スペインのバルセロナに留学しました。

明治村で最初に関わったのは、芝川又右衛門邸の移築復原工事です。株式会社魚津社、寺工務店の協力で進められた事業だったのですが、現地で解体されてから移築復原工事の



石川新太郎さん



芝川又右衛門邸の移築復原工事の様子

### 今後の課題

築対象とされた建物は、創建から解体時までに増改築が繰り返されている建物が多く、これら的情報を整理して限られた期間で事業を進めるには多くの困難があったであろうことを想像します。

明治村は、明治時代の空間を伝える博物館という側面を強く持っています。このため、基本的には、修理工事の際に建築意匠を変更することは行いません。また、部材の取替や修理の際の工法を選択する場合も、可能な限り在来の技術を踏襲することを目標としています。

ただし構造補強などが必要となる場合、人の目に触れない箇所においては現代の工法に頼る場合があります。その際には、当館の修理工事者スタッフ間をはじめ工事関係者内で議論を行います。

今後の課題は、解体移築 당시に十分に調査・復原出来なかったことについてどのように扱うかということです。現在は、大規模な修理工事を行う際に、改めて調査をして復原

着手までに10年ほど時間が経ってしまったため、倉庫に積まれた各部材は、建物のどの部分に該当する部材であるかが分からなくなっていました。また、中には腐朽して再利用できなかつた部材もあり、残された図面や野帳をもとに部材を選別・清掃するという作業からはじめました。

そこから想像すると、飯田先生たちが移築復原した頃は大変だったと思います。移



西園寺公望別邸「坐漁莊」の耐震補強金物、昭和の増改築時に施されたと考えられる。当時から補強を見せない工夫が施されている

重要文化財  
指定年月／1984年12月



奈落の風景

残り、歌舞伎以外に芝居や落語、浪曲、講談、漫才などが上演され、また政治の演説会の会場としても使用された、市井の人々にとって身近な存在でした。

### 江戸のカラクリ建築

呉服座の建築的な魅力は、芝居小屋の空間構成や舞台演出装置などのさまざまなギミックも復原されていることです。

### 小屋組と年代特定

主屋に配置されています。客席は舞台を正面にして、梁間10mの吹き抜けを中心に行けられ、1階の舟席を平場、1、2階の両脇に上下の桟敷、2階正面の向桟敷で構成されています。いずれの席も傾斜がつけられ、舞台が見しで構成され、舞台や客席など広いスペースは

漫才などが上演され、また政治の演説会の会場としても使用された、市井の人々にとって身近な存在でした。

やすいよう工夫されています。

そんな客席の周囲には花道など目に見える舞台装置以外に、舞台脇の離子小屋や寄席後部に楽屋が作り付けられ、また花道の下には奈落と呼ばれる隠し通路が走っています。極め付けは舞台中央の廻り舞台で、地下の中心軸と車で支えられ、人力で回されていました。

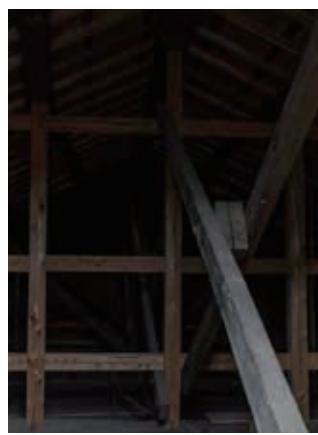
さざまな機能が作り付けられた構成から、芝居小屋はまるで大きなカラクリ建築のようです。

漫才などが上演され、また政治の演説会の会場としても使用された、市井の人々にとって身近な存在でした。

### 明治に残った江戸の賑わい

もうひとつ、呉服座の秘密の場所をご紹介しましよう。それは太鼓櫓に登るはしごから的小屋組の眺めです。暗闇に無数の束がすうっと立ち上がる姿は、この世ならざる何かが棲んでいそうな神秘的な雰囲気を感じます。

移築当時、呉服座は明治初期に建てられた。ところがその後の調査で、小屋組の形式や使用されている金物から建設年代が特定され、屋根も杉皮葺きへ戻されました。普段目につかない場所には、このような歴史の証人が隠れていることがあります。



小屋組の眺め。暗闇に束が立ち上がる（通常非公開）

1892年（明治25年）／1971年（昭和46年）移築  
木造2階建  
〔旧所在地〕大阪府池田市西本町

呉服座の外観。建物の前は縁日のような賑わいがある。また純和風の建築だが、正面の扉には洋風の枠飾りが施されている  
photo:Akihiko Mizuno

## 呉服座

江戸情緒を残す、貴重な芝居小屋建築

### お祭り広場

個性的な建物が集まる明治村の中でも、呉服座とその前の広場のような空間は、少しだけ異質な空気が流れています。ここだけいつも縁日のような風情が漂っているからです。呉服座は明治中期に建てられた芝居小屋で、元は大阪の猪名川の河岸にたっていました。縁日の風情を感じるのは、太鼓櫓から吊られた提灯や外観を飾る絵看板、人力車と写真スポット、そして小泉八雲避暑の家で売られている駄菓子も良い引き立て役となっています。からでしょう。

江戸時代の芝居小屋は明治になつても生き



寄席からの眺め。平場の両脇には花道が通る

# 明治の文化を伝える 文豪の住まい



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

森鷗外・夏目漱石住宅の縁側に佇む猫の置物。晴れた日には社会見学の子どもたちで溢れる



森鷗外・夏目漱石住宅の外観。日当たりの良い縁側

## 小説家たちの家

明治村では、構想の早い段階から文豪の住まいを移築・復原することを決めていたといいます。それは、小説が激動の明治時代を生きる人間の内面を描写したからです。明治村に移築されている小説家たちの住宅は、建築的に特化したものではありませんが、そこで執筆された作品や作家にまつわ



書院奥の現像室の赤い窓（通常非公開）

のエピソードは、それと同じくらい重要な意味を持っています。

### 森鷗外・夏目漱石住宅



漱石の気分が味わえる書斎の眺め

の協力で移築されました。その後、森鷗外の年代記『自紀材料』から、鷗外も住んでいたことが分かり、明治村に復原されたことで広く知られるようになりました。

日当たりの良い書斎の縁側には猫の置物がおかれ、来客を和ませています。興味深いのが、小中学生や高校生たちがこの家に惹きつけられていることです。文豪の作品と同様、この住宅は多くの人を文学の世界へと誘っています。

### 幸田露伴住宅「蝸牛庵」



幸田露伴住宅「蝸牛庵」の外観。右側が土庇のある座敷

もう一人の文豪幸田露伴が若い頃に住んだのが、幸田露伴住宅「蝸牛庵」です。蝸牛庵はカタツムリのことで、露伴は自らの住まいをそう呼びました。

露伴が書斎にした和室は、大きな床と棚、それに書院を備えた立派な座敷で、縁側の広い土庇は、柱が外への視線を妨げないよう少し離されています。また2階の七畳間も見晴らしが良く魅力のある部屋です。

この住宅の隠れた見どころは、小さな現像室です。元電信技師だった露伴はカメラが好きで、撮影した写真をここで現像したといいます。明治村には他にも小泉八雲避暑の家などが移築されていて、展示物から作家の暮らしや交流の様子を伺うことができます。

実はこの家は、東京の千駄木にあった頃から夏目漱石住宅です。明治を代表する文豪ふたりが時期を違えて同じ家に住んでいたという、まさに奇跡的な住宅です。

家として有名で、取り壊しを惜しんだ所有者

# 明治村で昼食を



素敵な建物で美味しい食事をいただくのは、豊かな時間を過ごす最高の贅沢といえるでしょう。

明治村には、明治時代を彷彿させるようなグルメが多数あります。

ここではその中でも、特に建物と一緒に飲食を楽しめるスポットをご紹介します。

※本情報は、2023年4月現在のものとなります。最新情報につきましては、明治村公式ホームページをご確認ください。



photo: Hisao Takeuchi/Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

文明開化をあらわすもっとも象徴的な食事だった牛鍋。牛鍋大井牛肉店では七輪に鉄鍋をかける当時のスタイルで楽しめる

## 大井牛肉店の牛鍋

まず明治村で外すことのできないお店といえば、牛鍋大井牛肉店です。かつては神戸市生田区（現中央区）にあり、多くの外国人居住者や地元の人々に愛された名店で、今も関西地方で4店舗を開いています。

建物としては、道路にミセを開いて奥に土間が通じる町家の形式ですが、外観が洋風で、特に2階のベランダには古典主義建築の柱があしらわれています。ずんぐりしたコリント式の柱と、鶴の装飾が付いたむくりのある破風との組み合わせが不思議なバランスを保



牛鍋大井牛肉店の外観。2階が店となっている



牛鍋橘コース。ご飯と卵、食後にシャーベットが付く



レンガ壁が美しい工部省品川硝子製造所の外観

て頬張れば、口いっぱいに肉の旨味が広がります。あとはご飯で追いかけるも良し、ビールで流し込むも良し。まさに至福の瞬間です。また、食後にされるシャーベットも嬉しい心遣いです。

## 工部省品川硝子製造所のデンキブラン

創業されました。窓のかたちが左右で違うのは、中2階があるため。アーチ窓側がバー・カウンターで、四角い窓側はガラス製品の並ぶおしゃれなショップとなっています。

バー・カウンターでは日本初のカクテル「デンキブラン」などのレトロなお酒のほかコーヒー・スイーツも提供され、レンガの壁面とアーチ窓に囲まれた空間でグラスを傾ければ、さながら外国のバーにいるかのような気分が味わえます。

※牛鍋大井牛肉店・デンキブラン汐留バーの詳細情報については、明治村公式ホームページを確認ください。  
[www.meijimura.com/gourmet/](http://www.meijimura.com/gourmet/)牛鍋・大井牛肉店/  
[www.meijimura.com/gourmet/denkibran汐留バー/](http://www.meijimura.com/gourmet/denkibran汐留バー/)

ち、面白い表情をつくっています。

ここで提供される牛鍋は関西風すき焼きです。砂糖をたっぷりまぶした鉄鍋に牛肉を敷き詰め、焦げ色がついたら秘伝の割下を入れます。沸々と湧いてきたら、焼き豆腐や野菜類を入れ、煮えるのを待ちます。ちなみに、ここでは白菜ではなく細く斜め切りにしたネギを入れるのが特徴です。

割下がしたたる牛肉を溶き卵にくぐらせ

次にオススメしたいのは、工部省品川硝子（がくす）製造所のバー・カウンター「デンキブラン汐留バー」です。赤いレンガの建物は元はガラス工場で、イギリスから職人や資材を移入して



デンキブランアイスとデンキブラン（スタンダード）



# 新しい様式

明治の終わりから大正にかけて、日本の建築デザインは揺れていた。

それまで盲信してきた様式建築に限界を感じたことが大きな要因だった。

一方で、ヨーロッパやアメリカでは新しい様式が次々に登場し、

鉄骨や鉄筋コンクリートなど新素材にふさわしいデザインの可能性も探求された。



## 明治村 タイル紀行

昨今のレトロ建築ブームを支えている要素に、タイルの存在は欠かせないでしょう。小さくて可愛らしいタイルから、大判の絵が描かれたタイル、くして削ったような荒い肌理のスクラッチタイルまで、さまざまな形状と色合い、手触りを持ったタイルは、多くの人々を魅了しています。

明治村でタイルを楽しめる名建築といえば、芝川又右衛門邸です。1階広間の暖炉にある睡蓮模様のヴィクトリアンタイルや、2階座敷の襖の奥に隠された暖炉の無地タイルは、マニアも唸る名品です。またベランダの幅木のタイルや1階廊下のタイル、トイレのタイルなど、館内の至る所にタイルが散りばめられています。

その中でとりわけ注目したいのが、ベランダの床タイルです。移築前、このベランダは屋内空間に改築されていて、残された資料では床タイルの色が分からず、明治村の石川新太郎さん(p.54参照)とINAXライブミュージアムの後藤泰男さん(p.78参照)が調査と研究を重ねて復原した特別なタイルです。

もうひとつ紹介したいのが、西郷従道邸の2階暖炉の染付磁器板です。瀬戸で制作された磁器板には、松島と天橋立、宮島の日本三景や、富士山と三保の松原が描かれ、まるで暖炉が一つの焼き物であるかのような装いをしています。こちらは正しくはタイルではありませんが、西洋のそれを意識して制作された陶工の技術の粋が感じられる、素晴らしい

作品です。



photo:Hisao Takeuchi/Akihiko Mizuno



広々とした館内と鋼材のシンプルな小屋組

明治5年に機関車修復所として建設されました。当時、鉄骨造は広々とした空間が得られる最先端の構造形式でした。建材はイギリスから輸入されたため、全てインチ・フィートで構成されています。

規格化された部材は組み立てを容易にし、

鋳鉄柱には壁の鉄板を取り付ける「つば」が付けられています。これらプレハブによる工事の簡素化は近代建築の重要なテーマでした。

また、現在は切妻屋根の建物が2棟並ぶ構成になっていますが、これは大正時代の移設時に拡張されたもので、内部空間の中心には

「明治15年東京鐵道局鋳造」と「明治34年鐵道作業局新橋工場製造」の銘が鋳出された柱が並んでいます。

### 新しい神殿

この建物のもう一つの見どころは、妻側から見た外観です。三角形の切妻屋根が柱頭のある柱に支えられ、古典主義建築を思わせるデザインとなっています。

視線をさらに上に向けると、浅い切妻屋根が羽を広げたような姿をしています。小屋組のトラスの下弦はタイバー（鋼棒）が用いられ、壁面のブレース（斜材）と連続して見えます。また部材が同色であることも、展示を妨げない要素となっています。

### 鉄とガラスの建築

外観の「ハミルトン・ワインザー製」の銘のある柱と合わせると、海外製から国産へ移行していく鉄道産業の歴史を辿ることができます。

明治5年に機関車修復所として建設されました。

当時、鉄骨造は広々とした空間が得られる

最先端の構造形式でした。建材はイギリス

から輸入されたため、全てインチ・フィートで

構成されています。

規格化された部材は組み立てを容易にし、

鋳鉄柱には壁の鉄板を取り付ける「つば」が

付けられています。これらプレハブによる工

事の簡素化は近代建築の重要なテーマでした。

また、現在は切妻屋根の建物が2棟並ぶ構

成になっていますが、これは大正時代の移設

時に拡張されたもので、内部空間の中心には

「明治15年東京鐵道局鋳造」と「明治34年鐵

道作業局新橋工場製造」の銘が鋳出された柱

が並んでいます。



古典主義建築を思わせる妻側の外観

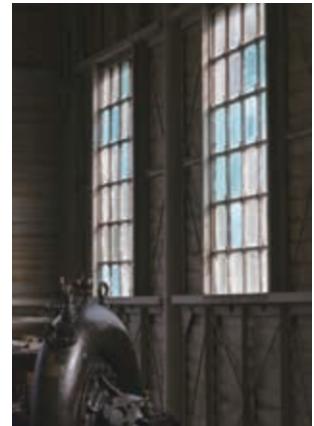


六郷川鉄橋から見た鉄道寮新橋工場・機械館。タイミングがいいと屋根の上を蒸気機関車が走る姿を見ることができる

## 鉄道寮新橋工場・機械館

古典主義建築的なデザインが忍び込んだ、鉄骨造の工場建築

### 近代建築の萌芽



窓のディテール。展示物に美しい光を落とす

### 鉄骨の工場と3つの銘

鉄道寮新橋工場は、日本に鉄道が開業した

近代建築では、鉄骨造による新しい建築が探究されて以来、クリスタルパレスやエッフェル塔などの傑作が創られてきました。その中には、古典主義建築をモチーフとしたドイツのAEGタービン工場という名作があります。明治初期の日本に、そんな先進的なデザインを連想させるような建物があつたことに、いち早く訪れた時代の潮流を感じます。

1872年(明治5年)／1968年(昭和43年)移築  
「旧所在地」東京都品川区大井町



座敷の襖に隠れた暖炉。タイルの色味に注目

財を成した豪商で、兵庫の西宮に果樹園「甲東園」を開き、そこで別荘や洋風・和風の庭園、茶室などを整備して、交遊の場としました。

現在の芝川又右衛門邸は、白い外壁に赤い西洋瓦をのせたスペニッシュ様式風のデザインで、昭和2年に改築された姿ですが、創建時は杉皮張りの山荘風の外観をしていました。2階の角を回る大きな窓や、立派な煙突とバルコニー、ひさしのついた広いベランダ、石積みの基壇とレンガのアーチなどは、当初の雰囲気を残しています。

**ざわめく細部の意匠**

玄関を入って目を奪われるのが黄金の壁です。木造の階段が巡る吹き抜けは金色の真鍮で塗装され、まるでゼツエッションの画家クリムトの絵画を思わせるきらびやかな空間となっています。

1階には他にも、玄関のステンドグラスや客室の網代と簾を市松状に組んだ天井など、手の込んだ意匠をそこかしこに見つけることができます。また照明器具も武田五一のデザインによるものです。

また小座敷では、開放的な出窓の手摺にハート型の「猪の目」があしらわれ、室内の建具の枠も凝った造形をしています。それらの意匠は、障子を締めて畳に腰を下ろすと調和した美しい景色となり、目を楽しませてくれます。

**移築保存とボランティア**

芝川又右衛門邸は、1995年の阪神淡路大震災で大きな被害を受けました。現地での



障子や襖を締め切った小座敷

1911年(明治44年)／2007年(平成19年)移築  
木造2階建て  
設計：武田五一  
「旧所在地」兵庫県西宮市上甲東園



芝川又右衛門邸の外観。かつては杉皮張りで、ベランダやバルコニーと合わせて山荘を思わせる姿だった



吹き抜けからの光を反射する金色の壁

## 芝川又右衛門邸

関西建築界の父が手がけた、遊び心のある別荘

### 新様式を目指して

明治の終わりから大正にかけて、日本の建築界は新しい様式を求めて揺れています。それまで模倣してきた西洋の様式建築に限界を感じていたことと、世界的な新しいデザインのうねりが日本にも迫っていたからでした。建築家の武田五一は、当時ヨーロッパを席巻したアールヌーヴォーやゼツエッションなどの新しい様式に着目し、その方向性を摸索した人物です。

芝川又右衛門邸は、そんな武田が新しい様式を取り入れながら数寄屋建築の意匠と融合させた、趣きのある別荘です。

### 山荘風からスペニッシュ様式へ

施主の芝川又右衛門は大阪を拠点に貿易で

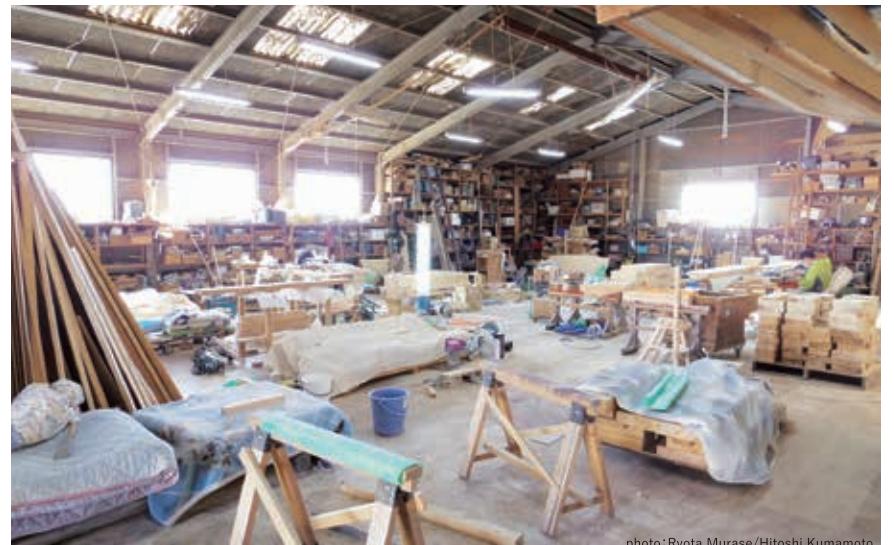
保存が難しく、明治村に移築されることになつた際、資金の多くは寄付で賄われました。

それ以外にも、有志による実測調査や、復原事業を請負業者が支援するなどの協力も得られたといいます。

また復原工事では、ボランティアが作業に携わるという、明治村でも初めての試みが行われました。現在では、このような形での保存や修復は全国で進められ、建物との新しい関わり方として注目されていますが、芝川又右衛門邸の事業は、その先鞭を付けた重要な取り組みでした。

1911年(明治44年)／2007年(平成19年)移築  
木造2階建て  
設計：武田五一  
「旧所在地」兵庫県西宮市上甲東園

特別インタビュー  
明治村を支える人々 3  
魚津源二さん(株式会社魚津社寺工務店会長)



魚津社寺工務店の工場の風景。堀川と中川運河が交わる閘門近くの本社には今も木材が堆く積まれ、木を削る騒音や匂いが充満している

**芝川又右衛門邸の解体と復原**

芝川又右衛門邸について明治村から連絡があつたのは平成7年のことです。阪神大震災で壊れた建物があつて、解体費は向こうが出すというので明治村で引き取ることになったから、2ヶ月後に解体して欲しいと連絡がありました。

解体の期間は3~4週間と時間がなくて、部材はその後、明治村の倉庫で10年くらい保管していました。その間に解体を担当した大工が移動して、部材につけられた番付がわからなくなってしまった。ですから、再調査の時には半年くらいかかったと思います。

復原については、飯田喜四郎先生が建築学会賞の大賞をとったバーティの席で、当時館長

1939年愛知県名古屋市生まれ。日本大学理工学部卒。「名古屋城本丸御殿」「旧川上貞奴邸(登録文化財)」など愛知を中心に多くの文化財建造物の工事に携わる。また明治村でも数多の修理工事を担当している。



魚津源二さん

だった鈴木博之さんに、組み立てる大工の手配はご奉公します、とお伝えしました。実は父が武田五一とご縁があつて、大変世話になつていたことから、その旨をお話ししました。



芝川又右衛門邸1階玄関のゼツエッション風の扉

勉強のために月一くらいで見学会について行き、可愛がられるようになつたそうです。武田さんは、名古屋に来た時にはライカのカメラを持って、ちよくちよくウチにも遊びに来ていたと聞いています。昭和4年ごろの話です。

そもそも武田五一はおおらかな人で、細かいことはあまり気にしなかつたそうですね。お茶の世界も実は「よく分からぬ」といって嫌いだつたらしい(笑)

デイテールがない。

### 坪百人のクオリティ

芝川又右衛門邸は、そんな武田さんのおおらかな感じが良く出ていると思います。和洋折衷で入り混じつてゐるけれど、山莊風の遊びの空間だから良かつたのではないか。武田五一はプロフェッサーで水彩画は上手ですが、実はデイテールがない。

数寄屋などの和風建築では「坪百人」といういい方があります。要するに一坪で1000万円かかる建物のことです。材料の吟味はもとより、細かい細工やその手間などを含め、それだけ手をかけることを意味します。旧藤山家住宅日本家(龍興寺寄殿)で武田さんと共同設

父の魚津弘吉と武田五一の縁は、覚王山日泰寺のコンペの時に、デザインの相談にうかがつたことがきっかけだったと聞いています。何度も行くうちに会つてくださつて、デザインを添削してもらつた。それが機縁となつて、

### 武田五一とのつながり

父の魚津弘吉と武田五一の縁は、覚王山日泰寺のコンペの時に、デザインの相談にうかがつたことがきっかけだったと聞いています。何度も行くうちに会つてくださつて、デザインを添削してもらつた。それが機縁となつて、



芝川又右衛門邸1階ホールの網代と葦簾

# 帝国ホテル

かつての帝国ホテルは、モダンな  
デザインに満ちた宮殿のようなホテルだった。

東京の日比谷公園前にたっていた帝国ホテルの旧本館は、鉄筋コンクリート造5階建てで、延べ床面積約8800坪の規模を誇り、凝ったデザインの装飾と複雑な空間構成が多くの人々を魅了した。

また、地震対策で施された構造的な工夫は、大正12年9月1日の全館オープン初日に起きた関東大震災にも持ち堪えた。



IMPERIAL HOTEL,  
TOKYO  
FRANK LLOYD WRIGHT ARCHITECT



スラブが複雑に重なり、思わぬ方向から光が落ちるメインロビー

かる起死回生の作品として、日本での仕事に情熱を傾けました。  
ただ、その設計には5年の歳月を要し、予算も当初の3倍に膨れ、果てはライト自身も解雇させられて、残された部分は弟子たちの手によって完成に至りました。

### 水平の空間と有機的建築

明治村に移築・復原されているのは、帝国ホテルの中央玄関ですが、かつては、この玄関か

ら大食堂、劇場・大宴会場へ至る中心軸の棟と、両側に3階建ての客室棟が並ぶ広大な建物が展開し、各棟の間には庭が設けられました。

特徴的なのは空間構成で、水平のスラブ（床）同士が複雑に重なり合い、スキップフロアや吹き抜けなどが立体的につながることで、館内の至る所にドラマチックな空間が生まれ出されました。

現在、それをもつとも味わえるのが、メインロビー上部に飛び出した3階からの眺めです。普段は立ち入ることができませんが、ギャラリーの木製スクリーンとあわせて、隠れた見どころになっています。

ところで、ライトは自らの建築を「有機的」という言葉で表現しています。例えば深いひさしは、軒先を軽量化するために六を開け、光を調節する銅板の装飾を入れることで、構造と採光とデザインが結び付けられています。

また、外装と内装に使用されている大谷石と簾レンガは、装飾だけでなく鉄筋コンクリートを流しこむ型枠としても用いられ、ここにも有機的な発想を感じることができます。



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

池越しの姿。独特の装飾はマヤ文明を思わせる。谷口吉郎は当初の姿に平穎院鳳凰堂のシルエットを感じたという

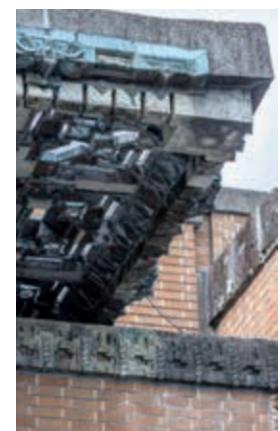
## 帝国ホテル中央玄関

世界的建築家が手がけた、唯一無二の名建築

### 帝国ホテルができるまで

帝国ホテルのはじまりは明治20年代初頭に遡ります。鹿鳴館の隣地に、外国人の賓客をもてなすホテルとして、外務大臣の井上馨や渋沢栄一ら財界人の協力で建設されました。

ライトが帝国ホテルに関わったのは大正5年ごろで、支配人が渡米した際に新館の設計を依頼したといいます。すでに世界的建築家として名声を得ていたライトですが、当時はスキンダンダルの渦中にあり、そこからの脱却の中でもひとときわ異彩を放っています。



### 巨匠の名作

明治村でもっとも有名な建築は、帝国ホテル中央玄関です。世界的建築家フランク・ロイド・ライトが設計した、他にはならない唯一無二の建築は、地方の作者が多い村内の建物の中でもひとときわ異彩を放っています。

ライトが実践した有機的建築は、実際のと



3階のギャラリー（通常非公開）

1923年（大正12年）／1976年（昭和51年）移築  
鉄筋コンクリート造3階建  
〔設計〕F・L・ライト  
〔旧所在地〕東京都千代田区内幸町

## 帝国ホテル中央玄関の 移築と復原



このインタビューに際して、佐藤彰氏と原眞佐美氏、金田美世氏からの証言と故西尾雅敏氏の「帝国ホテル中央玄関復原記」を参考にしました。



**反対運動と明治村**  
フランク・ロイド・ライトは20世紀を代表する建築家で、帝国ホテルは彼の作品の中でも一番重要なものだと思います。当時の東京の建築家もほとんどがそう考えていた。ですから、取り壊しの話が出た時、なんとか保存して欲しいという声が多く集まりました。でも、建物は老朽化して雨漏りはひどいし、それに低層だったこともあって客室の数が足りず、効率が悪かった。

ります。

メンバーは明治村から私と伊藤三千雄さんと明治村スタッフのカメラマン、そして名古屋大学から助教授の小寺武久さんと助手の佐藤彰さん、院生の上野法一さんが協力してくれました。伊藤さんは私の実家と一緒に泊まっていました。

実測調査は写真撮影と並行して行われ、野帳にまとめました。その野帳は、後に図面作製



photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno  
大谷石のつばのオブジェ。かつては球形の上部に金属が嵌められ、照明の役割を果たしていました

### 実測調査と野帳のこと

帝国ホテルの移築と復原で一番苦労したのは、建物をどうやって残すかということでした。そのための調査と実測を1968年1月5日から17日までの約半月ほど行い、私はその間、東京と名古屋を行ったり来たりしました。東京では、早稲田大学近くの実家から通いました。

取り壊しの撤回を求めて、当時帝国ホテルの社長だった犬丸さんに大勢の建築家が陳情に行くものだから、彼はついに呆れ返って、東京の建築家は出入り禁止になってしまいます。

一方、明治村は帝国ホテルの解体については静観していました。実は谷口さんは帝国ホテ

ルが大好きで、何とか残したいと思っていたのですが、資金のことや、東京の反対運動の顛末など諸々の事情があった。

その頃、佐藤栄作首相がアメリカの首脳会談後のプレスクラブで帝国ホテル取り壊しの質問を受けて、明治村が引き受けるといつてまつた。国際的な場でのアメリカへの回答ですから、帝国ホテル側も無下にはできない。それで、帰國後に谷口さんへ佐藤首相から直接連絡があって、移築と保存の筋道ができました。



大谷石を模したコンクリート製の装飾

### 移築と復原のこと

明治村で復原されたのが正面玄関と前面の池だけなのは、予算の都合と調査できた範囲、それとデザイン的にもそこが完成された部分だったからです。解体前の帝国ホテルは、3階建ての客室や玄関奥の大食堂、さらにその奥の大ホール(饗宴場)などが戦災を受けた後に改修されていて、ライトが手がけたオリジナル



金田美世氏が修復に携わったステンドグラス

デザインが残されていたのは正面玄関から入ったロビー部などわずかだけでした。復原に際しては、見た目を重視した「様式保存」を採用しようということになりました。しかし一方で、委員会では意見が大きく分かれました。「移築したもので復原すべきだ」という反対意見が多く、かなりもめたのです。「様式保存」に肯定的だったのは、谷口さんと私、伊藤さんと市川さんで、誰も担当者に手を上げなかつたため、実測調査にあたった私がやることになりました。それと、一緒に調査した



伊藤さんがサポートについて、設計と施工に指 示を出しました。

実際の復原作業には、委員会で決めたことを実行に移す西尾雅敏さんなど明治村の職員が尽力してくれました。西尾さんは、鹿島建設の設計部の方々と一緒に図面を作製したり、大谷石の風合いをコンクリートで再現するための実験も行っています。

もうい石材だった大谷石を丈夫なコンクリートで再現するという意向は、谷口さんの指示でした。谷口さんは石に対する造詣が深く、素材へのこだわりが強かつた。これが肝腎要だと考えたからでしょう。フランスではそこまでこだわりません。だから、その後の明治村の素材を重視する姿勢は、谷口さんの意思を受け継いだものです。そこには、建築家谷口吉郎の意志がいきている。

また、帝国ホテルの配置も谷口さんが決めました。他の場所は立て込んでいたので、一番奥にしたわけです。ただ、谷口さんは内部が完成する前に亡くなっています。完成をとても楽しみにされていたので残念です。

一方で、帝国ホテルの復原は予想以上にお金も時間もかかりました。解体から今ある姿になるまで17年くらいかかります。まずはとにかく外観が見学できるように、外側から復原しました。外観ができるのが

昭和51年で、内装が終わったのは9年後の昭和60年でした。

ところで内部空間については、谷口さんは設計を変更したいと考えていました。つまり、ホテルの頃の内部の姿を正確に復原したところで使い勝手が違うから変えたいと。ただ、他の委員は実物を復原すべきだという意見が根強く、結局私はその間を取り持つような仕事をしました。それが後にいろいろな批判となつて寄せられることになつた。直接電話でひどく叩かれたこともあります。そのことは、



光の籠柱の細部。大谷石とテラコッタの構成が美しい

今でもあまり思い出したくありません。  
ただ私は、これらの批判は時間が経てば必ず収まり、理解されるだろうと思っていました。現在では帝国ホテルは明治村の大事な建物として、多くの人に親しまれています。

#### 復原を終えて

実を言うと、私は調査に行くまで帝国ホテルに入ったことがなかつたんですよ。それに、あまり興味もなかつた(笑)モダン・デザインの建物は好きではないですし、ライトの装飾もうるさく感じた。空間が水平に連続するのもそんなに好きではありませんでした。

ただ調査で中に入ったとき、ライトはいい構造設計者と組んでいたことが分かつて非常に感心しました。アメリカでは建築家と構造家が組んで構造計画と施工計画をつくることが義務付けられています。

ライトは日本が地震国だと分かつて非常に高層にすることを止め、低層で天井も低く設計した。地盤が軟弱だったことも熟知していました。玄関に入つて階段を上るとホールに出ますが、あそこの天井は3階まで吹



玄関ホール。3階に見えるのが木製のスクリーン

き抜けになっていますよね。ここは高さが7m50cmしかない。普通のビルなら9mくらいです。それは通常と異なつて梁<sup>はり</sup>が上に出ているからできました。例えばホールだと手摺が鉄筋コンクリートの梁で、床は梁の下端<sup>したば</sup>でつながっています。それを徹底的にやつています。だから天井高を抑えても頭を打たないで低くできた。

復原された玄関ホールの吹き抜けに立つと、上部のギャラリーから木製のスクリーン越しに美しい光が射し込みます。ゴシック建築で言えば、クリアストーリー(高窓)の役割を果たしている。ライトは光の「デザイン」が非常に上手いですね。改めて見ると、やっぱりいい建築だと思います。

## 特別インタビュー 明治村を支える人々 4

後藤泰男さん(INAXライブミュージアム主任学芸員)



photo:INAXライブミュージアム提供

「水と風と光のタイル」展。復原された簾レンガとテラコッタ、大谷石で構成された空間は、柔らかく包まれるよう感じられたという

現在、INAXライブミュージアムの建築陶器のはじまり館には、帝国ホテル旧本館の柱が一本展示してあります。これは、2007年に開催した「水と風と光のタイル——F.L.ライトがつくった土のデザイン」展の折に、当時館長だった飯田喜四郎先生からお借りしたものです。

私が帝国ホテル旧本館の調査で最初に明治村に伺ったのは1999年のことで、その時は栎木の「プロジェクト008」を主催する大谷石チームと一緒にしました。現在の帝国ホテル中央玄関にある壺は、大谷石チームのメンバーが製作したもので、面白いのが、あちらでは「大谷石の帝国ホテル」として紹介され、愛知

1985年に伊奈製陶入社。東京駅など80件以上のタイルを復原し、明治村では芝川又右衛門邸のレンガとタイルを復原した。また「水と風と光のタイル」展や「日本のタイル100年—美と用のあゆみ」展の企画・運営に携わる。



後藤泰男さん

では「テラコッタの帝国ホテル」として紹介されています(笑) 帝国ホテルは伊奈製陶にとっても創業に関わった重要な建物ですから、大谷石チームと一緒に何かやりたいという思いがあつて、2007年の展示につながりました。

### ライトと職人

帝国ホテル旧本館は、無釉の土物と大谷石の相性がとても良くて、内装で用いられたタペストリーも含めて、柔らかいものの組み合わせが絶妙だと思います。その一方で、大谷石は外装材としては弱かったです。谷川正巳先生によれば、ライトは本来は凝灰岩の「蜂の巣石」にしたかったのが、生産量が少ないので大谷石になつたそうです。ただ、その大谷石の柔らかさ、加工のし易さが、あの複雑で美しい造形につながっています。

### 光の籠柱を再現する

2007年に、帝国ホテル中央玄関の裏側に置かれていた柱を飯田先生にお借りする際、「金箔ガラスモザイクを再現してほしい」と要望がありました。現在展示している柱の中並んだ金色のガラスモザイクがそれです。かつては目地も金色に塗っていました。



photo:Ryota Murase  
帝国ホテル旧本館の柱。ガラスモザイクが再現されている

ショーンによるミックスアップが起こったのでしょうか。ですから、帝国ホテルはライトの傑作というだけでなく、日本の職人が作り上げた傑作でもあった。私はそのことを声を大きくしていいたい(笑)

また「水と風と光のタイル」の展示に際しては、光の籠柱も再現しています。その時に驚いたのは、柱の透けたコーナー部にあるテラコッタが構造的にとても不安定なのです。そのままでは組み上げられないで、支柱を入れて組み上げました。でも全部が出来上がると支柱は不要となり、まるでパズルのように安定する。高度な技術とテラコッタのクオリティが必要になるのですが、再現に関わった職人たちがとても楽しそうにしていたのが印象に残っています。ですからきっと、帝国ホテルの建設現場も同じような雰囲気だったのではないかと思うのです。



photo:Akitomo Mizuno  
光の籠柱のテラコッタ

ライトは、自分の要望に応える石工の腕を見込んで、「デザインをどんどん変更しました。それはテラコッタの職人にもいえる」と、ライトは当初案よりもさらに上のデザインを要求した。それに職人たちが応えた。コラボレー



本物の価値を残す、伝える。

東京の桜花園小学校

19世紀半ばにイギリスで流行したバーレーンバックススタイルの椅子。装飾は伝統的な漆(うるし)に桜花の浮彫が施されており、当時の皇室を中心とした上流階級の間で好んで使われていました。

名古屋から電車とバスで約50分

博物館  
明治村  明治村



重要文化財西園寺公望別邸「坐漁荘」・  
三重県庁舎（明治村内）などをはじめとする  
多数の文化財施工実績があります



(株)魚津社寺工務店

神社、寺院、城郭、茶室、  
民家、近代化遺産などの  
調査・耐震診断・設計・施工  
(修理・耐震補強・移築)  
を自社で手掛けています。



名古屋市中川区西日置二丁目12-20  
☎ 052-331-3080



～祝 重要文化財 指定～

## 中部電力 MIRAI TOWER (名古屋テレビ塔)

〒460-0003  
名古屋市中区錦3丁目6番15号先  
TEL 052-971-8546



明治村  
みらい  
基 金

近代建築を中心とした貴重な文化財を残し、未来へ伝えていくためには、多くの資金が必要です。明治村では皆さまからの温かいご支援を募集しています。



## 文化財の保存・活用から まちづくりに関する計画や再開発まで

所在地：〒460-0008  
名古屋市中区栄5-1-32  
TEL : 052-242-3262  
Email : mail@spacia.co.jp  
HP : <http://www.spacia.co.jp/>



## あいちのたてもの 明治村編

2023年4月28日発行

発行者 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会 <http://www.aichi-tobunkai.org/>  
 会長 小栗 宏次  
 【事務局】名古屋市中区錦三丁目6番15号先  
 名古屋テレビ塔株式会社内 info@aichi-tobunkai.org

編集・企画 石田 富男(株式会社 都市研究所スペーシア) / 三好 学(博物館 明治村)

執筆 / 本文 村瀬 良太

特別協力 博物館 明治村

写真撮影 水野 晶彦 / 熊本 仁志 / 竹内 久生 / 伊藤 朋香 / 松田 尚流

写真提供 博物館 明治村 / 株式会社 LIXIL

制作協力 株式会社 魚津社寺工務店 / 株式会社 LIXIL / 篠 清澄 / 富田 ゆり

題字 新井 美幸 / 水谷 月菜

＼ページフォロー／  
＼お願いします／

イラスト・構成 村瀬 良太

＼ページフォロー／  
＼お願いします／

デザイン 墨 昌宏(有限会社エピスワード)

＼友だち追加／  
＼お願いします／



本書は「公益信託大成建設自然・歴史環境基金2022年度助成金」及びクラウドファンディングによる支援により制作しました。

◎クラウドファンディング支援者(敬称略、支援順)

川原田淳 / 未松憲子 / 文化ネット / 竹河志郎 / hayashi / 川岡 / 尾日向梨沙 / 有限会社佐藤工芸 / 岩見勝由 / 篠原一夫 / 大野嵩明 / 松田尚流 / 中野和武 / 秋田登文会石川 / Shinya Oguri / なおピカ / boo / 川田家住宅 酒井外美江 / 高村信幸 / 成瀬有美 / 長田和久 / 熊本仁志 / 根岸善之助 / 川畠愛子 / (有)丸鈴 鈴木宏始 / やすえ / Yutaka Taniguchi / 伊藤由衣 / 村瀬里奈 / 出口明奈 / 高橋昌子 / 石橋貴之 / 陣川貴道 / 鈴木道 / NANA YASUE / 青山修司 / 金田美世 / 曽根拓也 / 日高まゆみ / 日高史帆 / やまと / 富田ゆり / Kazuki / 田中稔 / 埼玉県川口市今井敏幸 / クッピラム太郎 / 大井俊二 / かわにし ようじ / Julian Bashore / 山本千恵 / 杉本節子 / 志賀佑香 / 田中愛子 / 篠田(堀場)靖世 / 岡潔 / 岡繁乃 / 山口ゆずみ / 山口富貴子 / 山口恒 / 鷺山晴菜 / 清水正昭 / 鷺山智穂 / 批杷屋 / 尾関利勝 / 猿渡直政 / 菅原郁子

## 国登録有形文化財とは

平成8年の文化財保護法改正により創設された文化財登録制度に基づき、文化財登録原簿に登録された有形文化財のことです。

それまでは文化財指定制度に基づく重要文化財(その中でも、世界文化の見地から価値の高いものが国宝)が指定され、貴重な建物が手厚く保護されてきましたが、その数は多くなく、急激な都市化の進展などにより、近代の建造物がその建築史的・文化的意義や価値を十分に認識されないまま取り壊される例が相次ぎました。それを決定づけたのが平成7年の阪神・淡路大震災です。震災による被害を受けた多くの未指定文化財が取り壊されてしまいました。

その反省にたち、国レベルで重要なものを厳選する重要文化財指定制度を補い、より緩やかな規制のもとで、幅広く保護していく制度として文化財登録制度が創設されたのです。

登録の基準は、原則として建設後50年を経

- 過したものの中、
- ①国土の歴史的景観に寄与しているもの
- ②造形の規範となっているもの
- ③再現することが容易でないもののいずれかに該当するものとなっています。

所有者の同意のとともに登録されるもので、登録されると相続税等の減免や保存・活用に必要な修理等の設計監理費などに対する補助を受けることができます。重要文化財と比べると補助は大きくはありませんが、厳しい規制がある指定文化財とは異なり、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められており、有効に活用していくことが期待されています。

なお、令和5年4月1日現在、全国で13,637件が登録され、愛知県は551件(全国6位)となっています。



登録文化財のプレート

## 愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは

愛知県内の国登録有形文化財の所有者を中心とする会(略称:愛知登文会)で、登録文化財の保存・活用を推進することを目的に、平成23年6月に設立されました。

平成23年度より文化庁文化芸術振興費補助金を受けて活動を行っており、これまでに登録有形文化財の魅力を体験していただく「あいちのたてもの博覧会」の開催や魅力を紹介する冊子「あいちのたてもの」の制作、文化財の保存活用について学び・意見交換を行うシンポジウムの開催などを行ってきました。

そのほか、毎年開催する総会は登録有形文化財を会場にお借りし、その見学も合わせて実施



豊橋市公会堂での総会の様子(令和4年度)

するほか、他府県の登録有形文化財を訪問し、交流を深める視察なども行っています。

コロナ禍でこの3年間は対面での活動が制約され実施方法を模索しながらの取り組みとなりましたが、一方でオンラインでのシンポジウム等の実施や愛知県の登録有形文化財の魅力を紹介する動画を作成し、「オンラインあいたて博」としてYouTubeで公開するなど、全国の方々に愛知登文会のことを知っていただき、交流を深めることもできました。

令和元年6月に設立された登録有形文化財全国所有者の会(略称:全国登文会)では他の8つの都府県の所有者の会とともに活動しており、登録文化財の保存活用の輪を大きく広げていくことができると考えています。

当会の活動をご支援いただける賛助会員の入会も募っています。皆さまのご支援・ご協力をよろしくお願いします。

愛知登文会 会長 小栗宏次